



犬事評判記

五

11

13  
903



13  
903

利 13  
號 903  
卷



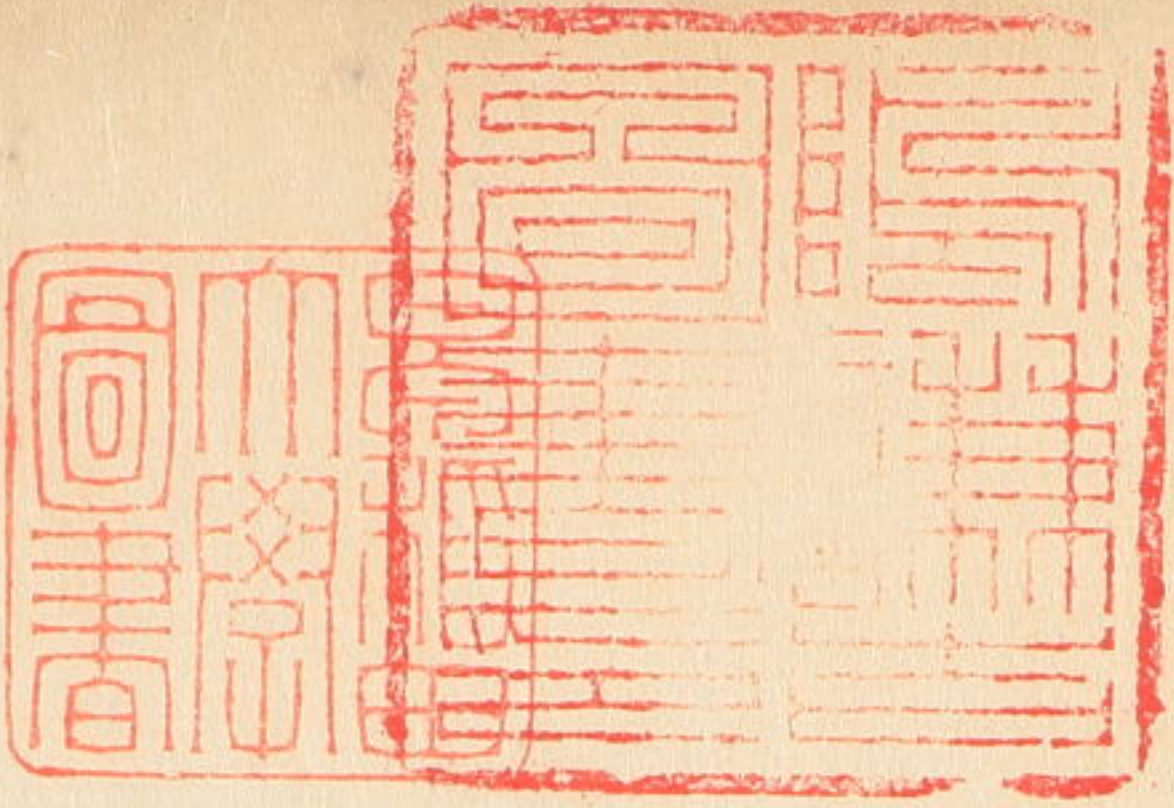
里見八犬傳評

犬東評判記

朝夷巡島記

犬東評判記序  
洪鐘懸石以八  
唯彼諸  
大東評判記序  
洪鐘懸石以八  
唯彼諸  
大東評判記序  
洪鐘懸石以八  
唯彼諸

由



陳家訓題詞  
大東評判記序

里久八丈集序

由

大東評判記序

洪鐘懸るといふと。鼓や此の鳴らる。細絲長し  
といふと。解や此の通下。微言崇論亦若是なり。  
唯彼諸語劇談は。乃世人の曲大鼓。拍す此の也。於  
力下ふ。鳴るへく。恰口中の錫に似たり。味や此  
也。解易なるへし。未だハ何れ共。卿談は方言多  
く。市語ハ故終詠たり。元ハ言耳に何り。心子と  
也。其ハ字ハ眼に熟考。以て也。音弄暮淡。殊情  
虚謬。小ト王著たる由此の通世代。寓言方便巧に  
く。且意味深きハ腹り程。是故ト唐山にハ。彼  
全毛ニ氏也如き。ま久ハ説を見。こト所りて。外  
書評論亦奇也。ま久ハ孤丈ハ才を以て。牛天を鑄

不似るといふことなし。鳥のさかぬさかぬし。  
甲斐人の枝園。その才亦ふ。上は好し。されは和漢  
乃不説を讀むを好む。乃不。屬者拙著大身の二  
書を。戯れに批評して。もて平出の標亭を示せり。  
標亭。これ余に傳へて。果否を問ふこと亦却て  
り。その評判數十條。視れり甚趣あり。これ得程き  
の知音を得て。歡しき。敢て辭し。聊的否を答述  
して。亦復笑ひを二子に取せり。さゆを書肆三青  
堂。標亭の相謀て。屋かて築業を登り。又余か  
言を求らば。推辭んとするに到成なり。嗚呼。敗障  
の掩ふこと。竟に隈に由るあり。故に  
之後。氣を籠。口を紫蘭の芳を説とも。亦何の益

由

あけり人。馬も亦舌に及ばず。語も亦録する因  
果あり。さハ今更に何を秘せん。此舉や癡人而  
前。夢を語ると相類を。境季の婦知。方有り。智可  
り。着官眼力横行して。此を知ること。蟹の如し。亦  
まを時好に投せんと。いと嗚呼。かましましき所。為  
るのみ

昔

文化十五年。歳値の著雍。楳堤。枯の夏。歸月上。洗。杜  
鵲を卜めて。鳴く中ふ。燈を燒。硯に呵して。飯台  
著作堂の南牕に序を。

馬琴廬史



小山と。入らざる世已由教奇の道高の道達者  
ある。板元さへ小同腹守。外に思葉にあふたる。  
年始状あふの何心世と。又来る春の新板とを  
己此ら弱にちあ何。王さふのいさあれと  
也。判者心私あ。譬。秋後の蛇の如く。先  
をさが左を専文と上。たむ心と。至眼牛馬を  
やま。りこ。う。大。口。之。さ。る。あ。る。也。何。り。翁。の。答。述  
に評あり

標亭琴漁識

大凡八里見八丈。障有也。此。上。時。の。心。評。凌

總評

三枝園主人評凌

里見八丈傳隆輯五卷

方一回  
至十回

上上 李基訓を遺跡に節に死

上上 白龍雲を挾て南に帰る

上上 一箭を飛べて使者白馬を懐

上上 兩郡を奪て賊臣朱明を倚

上上 景達信時暗上義実を阻

上上 氏元貞行尼に館山に返る

上上 小巻に義実義在集出

上上 芭舟に孝者鯉を逐ふ

上	良将策を退て衆兵仁を
上上	霊鶴書を傳て逆賊頭を
上	倉庫を南きて義実二郡を
上上	居年五奉て孝老三賊を
上上	景連奸計信時を賣り
上上	孝老節義美に諍を
上上	行者后座に伏姫を相す
上上	瀧田近村に狸鬮狗を
上上	盟誓を破て景連兩城を
上上	戲言を信して八層首級を
上上	大輔孝徳伏姫を故人に
上上	伏姫丈母に辭して富山に

右二十回の内題目素より本文と合ハナリその辨  
 本書第廿編不見元たりキリて題目を有キ  
 上上 曰元二輯五卷 第十一回より  
 上上 仙翁夢に富山に聚す  
 上上 貞行暗に靈書を奉り  
 上上 富山の洞に畜生菩提心を發  
 上上 流水に祈て神童未來果を説  
 上上 尺素を遺して因果自訟不  
 大上 雲霧を拂て妖孽摩て伏  
 至上 橋を飛して使女溪澗を渡り  
 上上 錫を鳴して大記総を索  
 上上 金蓮寺に番作雙を敲り

上上吉 拈華扇に手束客を留む  
 上上吉 白刃の下に馬鳳良縁を結ぶ  
 上上吉 天女廟に夫妻一子を祈る  
 上上吉 妬忌を逞く墓に蟬蛤を求む  
 上上吉 孝心を因りて信乃曝布に禊す  
 上上吉 蘇川原に紀二郎命を預す  
 上上吉 莊官舎に奥四郎庇を被す  
 上上吉 亀嶮共計稼助を賺す  
 上上吉 番作遠謀孤兒を枕す  
 上上吉 一双の玉児新を結ぶ  
 上上吉 三尺の童子志を述す  
 下 褒賤の批矣。取題目に拘るに可く是。譬々端場

由

伊り。仕込伊り。褒美の重きハ當場あり。輕きハ仕  
 込。端場と知るハし  
 朝市巡島記初編五卷 芥川龍之介著  
 上上上 栗津原六虫 本曾よし 仲  
 大上上吉 鐘倉山崩麴 のふん 自かん  
 上上上 月夜竊五島 野島め 浦  
 上上上 鶏鳴野鳥舩 おつてのこじん  
 上上上 遠山寺見櫻 將てかつさへかく段  
 上上上 山脚村教草 のふん 即手習  
 上上上 濱驛館蒲葦 秀作きやう  
 上上上 修善寺走湯 くの段  
 大のやう定承ハハハ  
 とくハハハハハ  
 のり願ハハハ  
 くらハハハハハ

由



上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上
上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上
糸季幡太馬	従死秋誓居	截活刀野帝	返汝湯島槍	林原中奔車	榎屋崑崙佛	帰伊野邊送	復讐絶念刀	朝霜狂司暇	夕立許我伊	在珠箱元眼	大石山遺馬	上	上	上
たきの	のり頼ま	ちのふ	まのけん	まのけん	あゝ	あゝ	あゝ	あゝ	あゝ	あゝ	あゝ	あゝ	あゝ	あゝ
期の	のり頼ま	ちのふ	まのけん	まのけん	あゝ	あゝ	あゝ	あゝ	あゝ	あゝ	あゝ	あゝ	あゝ	あゝ

宙

上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上
上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上	上
射向島証據	樹間隠返傘	下縁屏夜融	思白存地每	過去未會話	岩堰水煩禁	紙柳ササ并	岩神地蔵會	源悪剣山歴	慶田善百田病	迎旭江友鶴	上	上	上	上	上
算十一	算二十	算十一	算二十	算十一	算二十	算十一	算二十	算十一	算二十	算十一	算二十	算十一	算二十	算十一	算二十

宙

上上士 吟風溪獨勝

よし秀ちかあし  
白く人にあふ段  
とあふくりに改  
ゆのうきり改

上上士 磨出礪五日

おし秀みちか  
一怒にあふく人  
お太郎あひり  
横死改

上上士 古夢馬川堂

おし秀みちか  
お太郎あひり  
横死改

上上士 苗頃時濁水

おし秀みちか  
お太郎あひり  
横死改

上上士 客去鴈春霜

おし秀みちか  
お太郎あひり  
横死改

上上士 野干玉罩燈

おし秀みちか  
お太郎あひり  
横死改

上上士 蘇洵澤神巾

おし秀みちか  
お太郎あひり  
横死改

上上士 紹終袴遊偵

おし秀みちか  
お太郎あひり  
横死改

上上士 假裝束情郎

おし秀みちか  
お太郎あひり  
横死改

上上士 右褒貶の批矢小

おし秀みちか  
お太郎あひり  
横死改

上上士 或日一言半句に

おし秀みちか  
お太郎あひり  
横死改

上上士 ハ文章奇絶ある

おし秀みちか  
お太郎あひり  
横死改

由

板元云

聊の餘命に此ハ。出、つて市披露仕る。ハ

犬傳系に巡馬記の片三編、為冬ハ相違ふ人出板。

随筆古同放言也。今茲ハおめにうけらる、て市

吐りませう。

由



大勇評判記上之卷

曲亭馬琴屋伝

三枝園批評  
標亭琴澳改訂

ひい起 あく玉のとし立のへるあしたあり侍り  
もこのハ鷲あつて鶏か鳴く東形る曲亭の上こ  
本之あるに里見ハ大傳朝身巡島記ハ編りて  
お下物を思ひせ去毎に生板の沈沈もあし、月聞  
を承るに、作者近年い、麻身にあられ、蠶と心又  
懐逸の志ふふ人、戯作小鼻の着々、やうそれ下  
出来ぬと申、之をせいと申れ掌の痛々なる  
子で幕を扣へて、諸見物にものを思ひ来るよア

[Faint vertical text columns, likely bleed-through from the reverse side or a secondary text block.]



さきとてハ聞之ぬ人、当所三四卷のあはるもハ  
 彼作者との識ある由、あまりの事、お堪ぬは、江  
 戸の便りを聞かば、さきにわかしく、出掛けて、卷  
 のか、貴公の外に御要あつてか、上り奉好き、不  
 々拙者として、山寺同前より奉を見か、つて、ハ飯  
 時を忘る、果、あれは、由不学、の、明しき、お  
 日、ろい、と思ふは、わり、深、意味、の、志、る、よ、り、也  
 あり、ま、の、大人、三四卷、ハ、和歌、和久、の、指、前、あり、れ  
 とも、俗語、お説、を、も、権、ら、れ、を、和漢、の、雅、俗、と、奉、行  
 之、下、方、と、兼、帶、兼、備、の、才、子、あり、れ、ハ、その、と、し、く、の  
 物、の、本、の、等、前、に、ハ、見、玉、い、を、その、巧、拙、を、問、は、ん  
 事、加、る、人、に、と、お、し、お、折、あ、る、幸、ひ、ある、か、及、彼

作者に由縁あり、華流の金魚子も、葵宮かて、ハ、四  
 五日前より、当所、の、逗留、け、ふ、い、殊、さ、ハ、志、也、也、の  
 あり、春雨、着、を、徒、然、の、折、に、付、込、こ、大人、の、お、句、集  
 中、て、見、見、朝、来、の、雨、評、を、聴、尚、し、彼、の、編、を、待、也、也  
 こと、心、や、り、に、せ、は、や、と、て、例、の、誰、渠、を、相、侍、也、也  
 今日、説、を、は、最、中、に、も、る、と、や、い、き、そ、ま、の、図、ら  
 ち、よ、い、折、の、ハ、僥、倖、を、い、之、ま、し、た、志、の、お、説  
 引、下、され、ぬ、ハ、些、お、恨、の、す、七、あ、れ、共、終、り、あ、い、せ  
 之、れ、ハ、頼、山、と、し、大人、何、ぞ、人、願、ハ、ま、走、三、四、六、七  
 ハ、近頃、速、意、千、万、世、の、評、し、た、る、妙、作、に、也、れ、ら、啄  
 毛、容、れ、人、に、痛、痛、き、所、あり、一、し、され、ハ、之、七、卷  
 毎、に、彼、の、奇、あり、これ、ハ、五、妙、之、の、と、の、と、卷、之、ら、ん

ハ、ありし、子興あきてさ致、且彼人ヲ詔ふに似  
こり、如、さ、し、思、ひ、の、け、は、件、の、二、編、出  
板、の、比、思、ふ、し、ある、を、も、て、箱、試、し、評、した、る、  
一、卷、の、草、稿、を、京、へ、上、せ、て、金、魚、の、見、せ、し、に、や、か  
て、東、へ、下、り、て、作者、の、巻、を、開、き、し、と、あり、て、の、釋  
評、の、金、魚、の、持、て、り、せ、れ、ら、の、評、い、ふ、こ、お、あ、り、侍  
り、ち、ら、せ、し、生、文、章、を、讀、と、も、た、く、耳、聞、緩、の、る、  
し、寔、に、難、我、の、筋、あ、れ、と、も、さ、す、の、お、そ、の、事、は、り  
あ、の、し、携、お、と、返、さ、し、愛、相、あ、ら、ふ、人、し、か、ら、心、也  
此、ら、口、づ、つ、り、彼、二、冊、子、を、評、を、下、し、金、魚、の、作者  
の、胸、中、を、先、刻、承、知、の、事、あ、れ、ハ、評、々、的、の、る、と、當、ら  
ぬ、也、件、に、解、を、ハ、金、魚、お、も、し、る、し、  
あ、  
由

此、の、評、如、平、治、景、高、景、季、の、評、合、ふ、子、鳥、也、難、て、百  
疇、り、某、佐、以、水、お、あ、り、代、を、一、下、問、答、仕、ら、ん、よ、い  
本、好、さ、ある、程、作、者、と、云、者、ハ、ち、よ、つ、と、い、は、る、  
事、ま、で、也、化、箭、ハ、と、人、と、い、り、ま、せ、如、真、痛、心、入、た  
る、而、撰、抄、の、記、サ、ア、ハ、カ、あ、標、希、遠、り、よ、あ、し  
お、近、う、お、あ、り、あ、さ、れ、ま、せ、公、の、是、連、の、女、中、き、久  
魚、さ、人、ノ、カ、あ、ら、本、負、て、下、ま、り、ま、す、る、お、あ、ま  
へ、お、お、作、の、窓、螢、輝、談、也、讀、出、し、の、目、上、求、ま、り、て、  
大、事、に、か、け、て、持、て、お、り、ま、す、三、四、見、は、い、か、ま  
小、曲、亭、長、負、コ、リ、ヤ、述、感、ある、彼、ま、せ、り、ち、と、せ、る  
口、お、申、し、お、く、い、と、あ、く、そ、こ、お、い、ト、シ、ト、抑、遠  
り、よ、あ、う、む、や、く、評、の、聞、た、い、南、の、い、三、四、と、あ、ら

から先ふいたさふ朝夷か、八犬傳抄 女中 迄モ  
八犬傳抄の評あされませ、お願ひ申ります ま  
せとま 人 イヤ 人 高つかり ま 目ざまし  
い、朝夷が先トヤ 頭 東西 ま さい ま  
にせりあふて、ト 果 小のたまきませぬ、勿論  
人の好々あて、優者ハ ま 板元 ま 高に、甲乙  
ハあ ま 風聞、これ ま 見ると ま 朝夷  
トよし、八犬傳 ま よし ま 皆 ま 可れ ま  
一度に評 ま 先陣 ま 秀句 ま  
ら思 ま 前 ま 玉 ま 所詮 ま 八犬傳 ま 初編  
し、こ ま 任 ま 所詮 ま 八犬傳 ま 初編  
お ま 八犬傳 ま 初編

五冊ハ、戌の十一月賣出し、二編ハ子 ま 年十二月  
に出たり、巡島記ハ初編五冊ハ、亥の正月 ま 賣出  
し、二編ハ丑の早春出たり、その日教ハ ま 八犬傳  
也、聊毎に前後 ま 評 ま 八犬傳 ま 八犬傳  
お市 ま 評 ま 八犬傳 ま 八犬傳  
連 ま 評 ま 八犬傳 ま 八犬傳  
月録 ま 評 ま 八犬傳 ま 八犬傳  
月録 ま 評 ま 八犬傳 ま 八犬傳  
お ま 評 ま 八犬傳 ま 八犬傳  
頭 ま 評 ま 八犬傳 ま 八犬傳  
以 ま 評 ま 八犬傳 ま 八犬傳  
以 ま 評 ま 八犬傳 ま 八犬傳

如事、目錄として賣出し、遅速はよくあるか、此頃  
あり、升あきまきヤリトヤムリまぬか、  
頭取さし取、るる心、祝ふて一心志をませ  
シヤンクニシヤン さまりシヤン 下下是からか、八犬傳  
頭取 評判のむらり

里見八犬傳初編

詩三曰 叢瑞結城落城の段あり、さして評をへき  
程のこころあし、但、義実主後三騎落やく処、打と  
あられと玉匣、好こり等し、忠臣の寿、金匠、  
も緩めを撃つ、ま、不亭、かく、馬壇、鞍懸、柳坂、  
煙の後に遠難、大退林のほとり、あて、あかひ

上人句の例あり、あはる、嚼て含む、こころある  
も、若く作者の横看あり、つくりし地名、何ふさ  
るか、さて又三浦の磯、小艇まちして、義実龍を辨  
する段、婦人の身、い遠くて、あまり、小長、とヤ  
いとふべからん、志のれ、吾是も物識る端、あれ、  
ひとつ、く、小引書を擧ぐ、おのまほし、と思ふ、  
本書を見し、うたかた人、は、おの物語り、を待たぬ  
志ねり、おのれ、ふと、此、この物の、り、を、見、に、及  
ひて、ま、の、め、て、龍、の、品、類、れ、多、き、こ、と、を、知、ら、ぬ、の  
に、ハ、本書の名を、も、漏、さ、す、て、志、を、せ、た、ま、す、に  
何、小、す、や、ま、ま、せ、て、さ、く、人、只、さ、ハ、龍、の、事、の、長、い、不  
その本書、まで、悉、く、志、を、され、て、た、ま、す、し、ハ、物

識にあらふと思はし、經史を素流して、講釈を聞  
かふし、慰に見ふ本、陳喬漢が長を把て、舞  
伎を採集するや、見物小うて、  
〔若〕市地言何れも一理あり、彼辯長とていふ人  
ハ、眞のまゝ本好あり、河小長、僅に全部四五冊  
の物語ありん、おれらの辯論あり、  
之を長編大群の草紙といひ、かやうの辯論其例  
多あり、譬ハ清北天花才子の快心編の集、亦  
九回ある長色の辯、又逸田邊の女仙外史亦十  
回ある、唐寶兒の九州遊歴の事亦、要する  
物語の似たり、若、その筆力を見る、不足、是を  
編の彩色あり、君宗竹の、  
由

場、何り、急と場あつて、ハその曲と、ハハハ  
し、物語も亦此多あり、し、し、理をて、権と  
き、ハ義實を徒僅ハ三語、流人ハありて、進退充  
り、磯馴松ハ雨を降りて、睨視ハ腹を抱る折、優  
長らしと、たらたらと、龍の講釋と、ろてハ河  
るまじ、是則埋蔵して、風流於戲ハ意味を知ら  
ぬ、人の必いふことあるハし、作者ハ、ハハハ  
そこハ、河小長、三浦の磯ハ龍ハ、義實後ハ景  
達ハは、かちれて、釣して、鯉を求むるハ、椛たり  
椛ハハ北を、して、彼を引出す趣向を、ハハハ  
安南龍門の鯉、龍に游て、龍ハあるハ、ハハハ  
ハ、河れと、蟠龍時を得て、舞天し、鯉ハあるハ、





此、一説ある事ありあきし、あるへし、  
評、喉て神餘長狭伊を射ておとせし、洲崎の無垢  
二ハ、洲崎の住民あるべし、志あるに伏姫行者の  
崖に詣る段に、洲崎の里見の領分ありとていへ  
り、里見の所領に則神餘の領あり、神領の撃  
てし頃、洲崎の麻呂が安西の領分ありとていへ、無  
垢云ハ、洲崎に生れて、神餘の領内に、移住する男  
と見ゆハ、何の子細とあきことありとていへ、この男  
心ハ、洲崎の知事とあきことありとていへ、すべし、無垢云  
ハ、いふ所を聞くと、他領の人にして人、不都合に  
[答]無垢云、朴平ハ、金碗八郎孝者が旧僕、その  
事の孝者が切腹の段に見えあり、か、こ、こ、こ、彼

由

等ハ、神餘の再僕あり、その居る所、自領他領  
の居別あり、いふ所、志あり、昔故まの為、或ハ  
又、人の為に身を忘れ、思ひをいふとあり、  
返失せしゆとあり、世に一人は長狭助が、  
領分あり、あらむとていへ、洲崎の衆をいふ、  
あり、かくて其欲する所、故まの為に怒あり、定  
包を撃つあり、仁侠といふ、すべし、いふ所、志あり、  
志ハ、いふ所に云々と、是等の事をいふ、かきりしハ、金  
碗の切腹を、且看官に評せし、この事あり、故  
不、死あり、いふ所、孝者が臨終の物語あり、  
いふ所、いふ所、いふ所、いふ所、いふ所、  
一遍、いふ所、いふ所、いふ所、いふ所、いふ所、

評我実安西の館に來つる段と、為朝利勇が城に  
入る段と相似たり。かくて其趣を如えん正、いと  
かたかるべき也。亦あるを、為朝は一人之、我実が  
主従三人、志りも利勇が難題ハ、三つあり、我実が  
り、為朝は、つて二れを志し得て、南風原にかへり  
ナリ、安西の難題ハ、兵一つありて、虚事ニ、我実の  
れを志し得るは、景運の館をかへり、志、為朝ハ  
たふし、志、我実の思ハ、志、我実、全碗を得り  
よりて、七、我実の思ハ、志、我実、全碗を得り  
により、定色遂に滅亡す。輕に、濫用の對、よし、学  
厚得失似たるやうにて、よく其さまをかきかえ  
こり、是ハ奇妙の筆あるか。

よ、弁好き 誰か見る処も、虚り如し、これらも、  
ねて、抑同意く、  
評我実毛、醜太郎元頼といふ姓名ハ、誰か仰り、名と  
志らざるべき、おと、仰り、名と、聞えたる朝勇ハ、  
龍堀園ハ、三卿の眼代、其、いハ、一個ハ、  
更、其、ハ、さ、山、あり、人、又、其、醜、者、ハ、一、郡、ハ、城、代、  
れ、其、定、色、ハ、股、脇、腹、心、と、聞、え、たり、志、ら、る、ハ、仰、り、  
名、め、か、せ、せ、と、も、童、と、れ、と、る、名、ハ、あり、せ、た、り、安、  
西、ハ、家、臣、あり、蓋、テ、訃、平、也、是、ハ、お、と、唐、山、ハ、十、  
説、ハ、何、龍、何、虎、あり、喝、ふ、る、仰、り、左、ハ、あり、と、い、ふ、  
と、も、こ、の、醜、ハ、訃、平、等、ハ、山、下、安、西、ハ、腹、心、の、山、の、  
あり、に、か、む、かり、の、姓名、あり、ハ、う、ち、聞、く、より、ま、



酷六の酷の名を、まあると流ときい、甚云と  
異あふを、訛子と此不能在河此、訛平と云ふ人  
日、作り名おの限る、かふを、彼等が行状、民を  
虐げ、酷吏に等しきものあり、所云名論自稱、  
て、實録おの往々さる番河、志ふ、一作者の作  
りし名で、山、こ、らに、あ、ん、と、人、と、あ、し、  
融、堀、園、ゆ、山、これとおあじ、大坂お、融、堀、と、い、ふ、地、名、  
れ、融、堀、と、い、ふ、苗、字、あ、し、と、せ、を、彼、が、甚、貪、  
ハ、亦、是、名、詮、自、性、こ、も、し、百、姓、為、人、あ、し、名、が、大  
野、の、や、う、の、南、元、緯、野、を、呼、ぶ、や、賊、の、替、問、の、狂  
名、の、お、の、ゆ、さ、ハ、し、ゆ、ふ、と、推、し、ゆ、を、一、し、之、の  
心、の、見、る、と、き、ハ、麻、呂、の、男、根、の、事、と、思、ひ、  
金、碗

由

お金精の、隠語と、南、り、心、聞、つ、し、そ、こ、に、疑、推、の  
起、ら、ぬ、の、素、より、麻、呂、と、金、碗、ハ、作、り、名、あ、ら、ぬ、  
し、れ、に、あ、り、又、彼、麻、呂、も、安、西、も、戦、実、の、相、手、お、  
と、ら、む、さ、ら、に、よ、つ、て、義、実、ハ、一、ト、の、義、兵、を、把  
り、て、お、り、僅、に、八、十、余、日、あ、り、て、二、郡、を、討、ち、流、  
たり、麻、呂、安、西、を、相、手、に、是、ら、祿、ハ、况、そ、の、下、狗  
党、の、子、人、に、放、散、さ、れ、て、何、り、先、生、さ、や、り、お、  
り、ま、せ、ぬ、か、  
頭取 東西々々、佛、の、い、き、ハ、さ、る、ま、あ、ら、し、  
佛、即、言、ハ、佛、無、用、翁、の、卷、中、さ、る、を、佛、神、妙、お、聞、下、さ  
ま、ま、せ、し、  
卷、只、今、畏、負、連、中、の、申、さ、る、と、云、く、麻、呂、安、西、の

家臣といふもの、いと寛きハ故ありて、厚  
この三将の合戦ハ、ハ大士傳ハ發端まであれ  
ハ、卑くかたぢけるを、とせ、もし里見と  
麻呂安西が、合戦のみを、作り改けし、物語に  
あるまじハ、評者の疑難さゆへ、し、麻呂が家  
臣に名をよせしもの、一人もあられと、抱身  
し、うと、思ひれぬ、口、口書や、まに、阿る、正して、  
既に麻呂が滅亡ハ、板倉氏元が使者、蜷崎十郎  
輝武が、口上して、事済せし、これを縮地の父法  
とせ、三國志漢教に、心孫瓚が滅亡を、とく、必  
同じ、概あり、を、て、無用の人を出して、その、陸  
定、う、ら、ね、ハ、看官之を、修作とせ、と、う、と、と、も

無用の人を者人正ハ、あ、う、く、と、あ、し、推  
よし、や、人教多く、と、中、途、あり、立、滅、して、存  
と、し、さ、こ、と、し、落、着、の、知、れ、さ、る、を、好、作、と、い  
ふ、つ、の、り、也、麻、呂、安、西、が、滅、亡、を、只、九、回、で、書  
続、り、し、り、作、者、の、為、に、推、我、の、場、あ、る、に、人、数  
か、算、と、て、推、せ、ら、れ、し、う、う、へ、て、ち、と、理  
屈、に、何、と、さ、る、歟、今、ハ、評、者、の、と、り、出、さ、れ、し、水  
漸、崎、を、見、玉、へ、か、し、彼、馬、依、を、宇、朝、の、大、臣、と、て、  
富、貴、驕、奢、の、前、元、功、れ、と、し、樂、の、為、に、奔、走、す、  
と、り、汁、と、し、兼、お、し、陸、虞、候、富、貴、の、と、そ、こ、に、名  
を、出、す、と、の、一、兩、人、に、追、き、お、れ、と、し、看、屬、家、臣  
多、かり、と、お、う、つ、か、お、ら、る、ハ、只、書、さ、ま

にある事にて、地作の及、水漸の妙、玉、う  
を本、おとつる之、理屈、よつて、小説、趣、質、  
関、七、に、横、死、せ、し、人、物、を、死、お、て、し、十、也、唐、清、が  
見えぬといはん、かくて、理、外、の、幻、境、に、遊、ん  
正、に、推、ある、し、

評定官が撃つ、とき、尺八の竹館ハ、よく心に在  
用ひし、し、か、あ、かくて、義、実、ハ、山、下、を、討、滅、し、て、  
その二郡を得たり、さて、安、西、と、割、據、し、て、一、國、を  
ぼ、く、無、事、あり、上、総、を、娶、り、竟、に、安、西  
を、亡、し、て、一、國、を、治、め、たり、折、り、し、鐘、倉、に、ハ、持  
氏、の、末、子、成、氏、也、老、の、中、道、と、あり、て、義、実、が、仕  
官、を、京、へ、と、り、あ、し、申、せ、し、ゆ、に、義、実、其、歡、ひ、に、享

鐘倉へ使は進らせたり、と、ゆ、り、志、す、ハ、鐘、倉、へ  
ハ、往、進、し、ヤ、自、在、に、あり、ぬ、と、見、ゆ、る、に、安、房、國  
一、派、り、し、臣、火、季、基、の、事、と、て、ハ、一、言、も、い、ひ、出、さ  
ず、火、の、障、設、を、知、ら、ず、と、い、ふ、と、山、眼、前、に、その、落、倉  
を見、多、る、お、も、い、ふ、を、何、も、し、せ、し、曩、昔、に、能、田、を  
獲、た、る、と、き、一、番、に、火、の、音、捉、を、吊、ひ、又、人、を、  
て、障、設、の、逆、を、尋、み、させ、墓、所、を、見、出、し、立、派、紀、事  
あり、さ、る、を、北、事、絶、て、あ、き、ハ、大、あ、る、不、考、と、云、ふ  
へ、し、こ、う、作、者、の、手、ぬ、み、り、あ、ら、ず、や、  
○此、例、の、理、屈、あり、義、実、安、西、を、滅、し、て、安、房  
を、う、ち、後、へ、る、進、を、一、期、と、せ、る、物、張、の、結、局、を、  
ら、ハ、そ、の、事、必、を、あ、く、て、ハ、稱、ハ、也、と、い、て、義、実





といはるし事、この評にのみ限るべし、志うに  
ゆれと云、評者の疑懼も、勸懲に係れ、そのよ  
しあしと云、あふを、いと短かく云ふと書  
かりしに、手ぬかりあるべし、

評忘れたる事こそあれ、是あり先、畿田の城攻に、  
鳩に附く、全破が檄文、巧拙はおのが志ること  
に、何ふねと、僅に安房の二郡を争ふ、垂觸の戦ひ  
小い、不相當なる文段、あつ何うぬか、漢朝ふて、仁  
義の事と唱へ、国号を違、天子と稱するとき、その  
臣たる大将が、檄を文書めきたるやうに、覺や  
る小癖目も、

答 おお、理屈に似たれ共、これ、寔にいはれ

たり、うち見了所、評の如し、さるあふ、そこ  
が作者の戯れて、一二郡のあ迫合を、さも物  
なりき、檄文に、書あしたるか、趣向あり、もし  
を山て、推とき、全破毫を揮ふと云、云々、漢  
文かて、ハ、當時城中に籠りたる、士民に、流雅  
り、小人、流を、鳩の脚に付る、謀も無益なる人  
あふ、小流、小流易き、平假名にて書あそよ  
り、けれ、こ、則、理屈、虚実の境に、惑ふもの  
あり、彼、漢文を、流あつて、流を、と、ふ、士民、あ、れ  
素、小、又、章、物、り、き、ハ、然、め、あ、や、り、評、あ、し、  
評、五、の、卷、の、初、了、里、見、籠、城、の、段、に、民、荒、年、の、役、に  
あ、め、れ、て、催、使、お、後、い、志、唯、呆、れ、た、る、云、々、と、何、り、

この徒ハ書といふといかむや、里見ハ素より  
仁義の君あり、二郡も民既に其徳ヲあがきたり、  
荒年ありとも権威ヲ去たかり書と云玉あらん  
や、おらハ書やうあるべき事歟、譬ハ劉玄徳が、  
江陵長坂の敗軍の玉く、民をへ城ハ通りこもり  
て、仁君と存亡を、共にせんとする程ハ、いさノハ  
兵振錫こり杯と、いハハ、いさハ、いさハ、いさハ、  
実ハ八房に對して、いさハ、いさハ、いさハ、いさハ、  
らむ、百姓をいさむ心ありて、いさくより入  
し

○此の評山平出来多し、さ里那のふ、聊ある言  
筆質をとらんとして、前所の文を高れたる故、五

の巻九回ハ幼段ハ、安西景連不意に獲つて、  
瀧田東城ハ西城を、失々として、困りしと、何れ  
ハ、縦義実の仁義子あり、まじ民あり、と、城外に  
何ともありハ、其ハ死せんとするにありし、又  
荒年の役に勞れて、権臣に役ハせといふよし  
ハ、敵ハ大軍推よせて、後ハ城ハ権臣に、後ハを  
といふに、人何とも、荒年のつりれにありて、定  
め何とも負を、いきたり、これハ正を得ざる故を  
り、されハとて、倉粟を掌ふ山の、金の、餓玉を  
外にして、民に甚沙汰せむや、何とも、き、虚紋を  
市ふそありれ、或ハ半減、或ハ三分の一の権臣  
ハ、何とも、りれど、それを、らあき袖ハ、りれず

高き枝の根きゆるに、さし聞えぬか知らぬ心  
も、これを権便に後ほせといしあり、その解  
しやいなりて、意味大ききおちおへり、志ありし  
おのふまに見られたる、あ、うをいふ山の禱  
ありし、甘心々々

評 此れも、後先ありし、その巻不同のたふり  
玉梓が最後の宛言、金碗八郎をいふまへて、拒  
て若輩をきるあふハ、此も又遠うふを、又の錯と  
あるカ、いあらむ、その家あつく云々といへり、是  
ハ金碗が、玉梓を斬らんといひ、一向へて、玉梓  
又、此も丹の錯云々といふあれハ、そのありあり  
又我実を罵て聞きし、お似ぬ馬將あり、殺さば

殺せ況孫まで、畜生道に導きて、この世ありある  
煩悩の犬と云ふ人あり、いふをハ縁あり、縁あり  
誠にいひ、義実玉梓を不拜を責て、けおあやま  
りて、此淫婦ハ愛せざるを害へり、犬すら主を知  
るもの畜生に比れりし淫婦あり、かゝる風犬  
を野に放さハ、又いふ人、人をか破らん、あま  
いハ、いへて、南無し、お似ぬ馬將あり、殺さハ殺せ畜  
生道、云々罵らん、言葉のちとせ、お似ぬ馬將あり、  
猶よあふ人、お似ぬ馬將あり、いふをハ、いふをハ、  
義実玉梓の問答を、犬つくとしに在ると、まハ  
承せぎて、あふに、お似ぬ馬將あり、玉梓義実を罵て畜  
生道へ導かん、この世ありある煩悩の犬と云

さん杯いふことハ、不意に出たる怒言ありハ  
翁官之を耳にとぬす、かくてその言の、遂に空  
しあふぬおて、現さること山阿りけりと思ひ  
念さするか作意之、理屈をいふれてよく見ら  
れよ  
まゝ本好き犬の子を養ひたる、狸の文字を引わ  
りぬハ、里の犬子て里見の犬、又伏姫の伏の字を  
人に从ひ犬に从ふ、されハ八房の伴水て、富山の  
奥に入るといふ、狸と伏の字の對絶あるにこ  
ゝらの評は、十せせふれぬぞ、**ひいき**さすとも  
お孝の下男か女中の垣間見るやうに、伏むあり  
垢るか能てハ、ほろまいたつといふ、唇てくまぬか

以、  
**評**五の巻十回、犬の段に、伏姫翁九の犬の籠物流  
をよこ居あつといふ、少し亦の道さすにハあふぬ  
次、伏姫ハその身を八房にたとせ人といふハれし  
事、志らてをふハ難ありれとも、既にこゝおてハ  
姫の内心示ありて阿り、扱ハ犬の物のたりあは  
見りゆ、うとまし、くおそ思ふ阿りれ、志ありこい  
ふハ、その場のとま令せまておて、その文の飾は  
れハ、おふく怒むへき事おあはせ、とよ  
**答**その場のとり合せ、文の飾ハ勿論あり、志の  
し伏姫が、枕の草紙見、お人ハあへて八房に  
ハ拘ハるを、條々を讀、不かに翁九の段おいた

りて、八房の犬が有り、それより姫八房山  
の奥へ伴ふ、時誼にありしが、故らに怪きま  
り、こゝ格ハ、月氷奇縁嵐の段におまじ、犬の物  
語を見人として、求めて枕の草紙を、とて出せし  
み、何れを、と、いしく書し、ふ、また彼書を見  
さす、山々、為之

評 おあし段に、義実五十子に封して、か祢と好心  
おつ、伏姫を大輔の妻にせんと、おまじのよしを  
告る、傍に、伏姫を、なれば、聞かざる、し、さて、ハ二  
編に、伏姫臨終の言葉に、聊さまたけ、何れ、志すれ  
ば、い、つに、世人、お、て、ハ、この事を、義実の、あ、  
を、五十子に、言ハ、て、か、あ、い、ぬ、事、の、や、い、之

伏姫その物語を、側浦を、ると、大輔の事、火  
の心に思ひ、の、こ、わ、て、正しく許せし、何ら  
され、ハ、露は、かり、の、懸念を、の、あ、た、そ、ハ、姫の  
氣象を、推して、山、量り、知る、き、事、あり、評、の、如  
く、お、あ、て、義実、大輔、の、事、を、五十子に、い、ハ、さ  
れ、ハ、預二編に、い、こ、り、て、神童の、未来、果、を、説、と  
あ、ち、に、稱、い、せ、こ、の、婚縁、の、心、何、り、て、か、へ、つ、て  
犬に、と、山、あ、ハ、此、ハ、看、官、の、い、と、を、し、み、山、信  
を、へ、く、又、彼、ハ、犬、士、ハ、姫、と、大輔、に、ま、つ、て、出、現  
する、正、を、後、に、志、の、と、志、ら、せ、人、為、に、此、物、語、に  
お、よ、べ、る、あり、元、来、伏、姫、に、色、情、を、け、れ、ハ、臨、終  
の、言葉、の、さ、枝、と、け、お、あ、ら、ぬ、あり

評をへて此大の段ハ親子三人別離の情至れり  
尽せり、又評の奇絶、更にいふ一ふを伏姫大に  
付しての理論ハ、存逐に其理に服して、怒をおお  
ひといまりしと、初編の抜華ハ、この一段に  
まれり

ひいき さやうく、この大の段を流して、法然とせ  
ぬものありし、ふ、か作者の妙をみる

頭取 それ故目録にも、初編の巻軸にすまじた

よき本好き 所兩所と云に、御太義千不且と申  
入あされまゝして、二編の評を願ふ事

大弟評判記中之尾

曲亭馬琴存述

三枝園 批評  
樗亭彦漢 攻訐

里見八犬傳 二編

評ハ大傳、二篇、亦十二回、初段のおきめん句、ち  
と長延、やうあれとも、もへて可華集の歌の言  
葉もよて綴りたる、又評のお終し、こゝにいぬ

よき本好き ある程く、見入人ハ又格別てゐる、神  
童にあふばかり、始終伏姫ひかりてあがくと  
舞臺をいせたる、上手の筆才、佳と見えまはる、  
段々と讀むうちに、いと美しき姫君が蓬髪をふ

り乱し、羅綾の袂敗れ垢つきありし傍にあり  
れ共、窈窕、まゝお不美し、とひとり言する物  
のいふや、故、谷の戸液を驚か、あく音にまゝと愛  
こか小人、と思ひやふれ、之、目前に、姫うへの姿が  
見え、やうあり

匣第十一回、義実の霊夢、自行が注進の段に、ま  
して評きへき事とし、十二回、富山の段に、伏姫思  
ハナ、止水にうつるに、顔、犬の如く見ゆるに  
驚き、それより有身ころ、おもしろし、これ、初編  
の出像に、趣あらせんとて、犬、顔、うつりし、因  
を出世により、その繪においせ、人、為、状、又もト  
めき、此趣、何りて、画せ置たる、状、何れもせよ

犬の氣を受けて、懐胎を、一時、不圖、犬の顔に  
見え、しまでにて、かろく書おき、後に、仙童、并、下  
と、解せ、ふ、妖あり、これ、此二編を見おし、前  
お思ふ、この、伏姫、ハ、房、お犯し、おらされ、山中  
お起臥するうち、ふと、一夕の夢に、班衣の義男、来  
て、思はず、枕をか、いせ、正あり、只、一、ま、おふ、喜  
塊、心、お、い、以、ゆ、お、き、あ、や、ま、夢、を、見、つ、る、あ、と  
只、管、心、お、か、く、る、程、に、有、身、ころ、お、く、病、せ、づ、ら、ふ  
あ、お、い、ふ、趣、向、にて、お、あ、ら、人、放、と思、ひ、た、其、処  
を、一、段、う、ち、趣、で、犬、の、姿、お、見、え、た、る、の、こ、お、て、そ  
の、氣、を、感、通、せ、し、こ、い、ふ、こ、の、趣、向、実、お、妙、あり、  
因、判、の、詞、も、再、妙、お、王、上、水、の、面、影、ハ、お、ト、め、よ

りたくにおける之、ありや夢寐あり共、淫奔の  
層ありて、さて存身たらんおし、我女の爲めに  
ハ大おる疵あり、この間を脱之人正、殊に雅舞  
の場とせ下し、具眼の人におられれば、か  
評つあることかまし、甘心を々々、

評義実仙翁の示現あまつて、富山に到ると大輔、  
洲崎明神、那古の観音を念ふて、霧のちると、伏  
姫因畢りて、今夜の経をよむと、八房の最期と、  
三方ひとつおはむと、あこり哥々妙々、美々  
外人の及ハぬ筆あり、伏姫いつありん、籠籠の声  
走こわたり、八房きく正切あり、あこいふ文句そ  
ゆる寒きまで哥之、伏姫も八房も、入水に心透し

この在、入水させず、大輔が鳥銃に打せたる、赤妙  
之、八房ハ姫のかこを見らへり、川辺を指し  
て行折らふ、ポイント大鉈の音をきき、絶妙とい  
ふべし、又おしき伏姫、仙翁仙童、一方ハ夢に  
一方ハまかありありにし、大輔が兼暦ハ、物後  
おしたる、三方ひとつのおち、今をとおの、様子  
をかえたる、作者の用心、きつと見とある也  
答にわく、答られ、持あがらんと、真にうけり  
にハあらぬ也、全聖歎が橋上登り、毛声山が  
室お入るにあつて、いり下か、評論こハ、に及  
人実ハセが、爲の知音あるかあ  
て、口いひ、持あげるとあるま、い、か、あ、し、答



られて、腹を、つゞの、あし、いづれ、江本であら  
れば、むやらぬと見える、  
ひいきやうまし、黙って、聞て、ねろ、様、唐人め、  
評、大和尚を、初編の、端、像、かて、見し、とき、大輔  
あし、人、の、思ひ、かけ、さう、き、これら、の、趣、向、亦、奴  
あり、義、実、の、胸、中、に、彼、ト、や、日、せ、東、全、の、事、伏、姫  
の、事、功、り、あ、た、や、違、犯、の、罪、を、か、る、して、東、条、の、ま  
にあ、す、と、も、伏、姫、あ、く、あ、り、て、大、君、の、聲、と、い、永、学  
にあ、し、さ、で、ハ、寵、字、全、あ、く、ま、と、見、れ、ハ、世、外、の、人  
あ、あ、る、を、あ、の、く、に、欠、こ、る、所、あ、る、る、き、但、ハ  
郎、と、い、ハ、大、輔、と、い、ハ、義、勇、の、人、あ、る、に、後、輩、あ、き  
ハ、殘、念、あ、り、あ、く、ハ、少、し、作、者、の、手、め、り、あ、ら、ん

次、又、八郎が、里、見、を、佐、け、た、り、ハ、古、ま、の、齋、を、う、こ  
人、為、の、こ、か、して、お、の、加、學、を、思、ひ、に、あ、ら、せ、さ  
れ、ハ、後、あ、ま、が、八、郎、の、本、意、あ、り、と、い、ふ、を、た、ふ、く  
こ、た、る、ふ、て、も、あ、り、人、次、と、い、は、れ、ハ、八、郎、既、に、自  
殺、し、て、そ、の、義、勇、合、け、れ、ハ、そ、の、子、の、大、輔、に、後、輩  
あ、う、せ、ん、も、難、あ、ら、る、し、あ、れ、と、い、ふ、あ、て、ハ  
悞、り、か、せ、せ、ハ、大、輔、ハ、ま、の、息、女、た、る、伏、姫、を、撃、し  
罪、あ、れ、ハ、あ、り、し、か、ど、し、と、い、ふ、か、く、ハ、全、碗、氏  
の、微、運、と、い、ふ、し、  
評、全、碗、八、郎、ハ、國、士、一、義、烈、の、人、之、才、を、  
て、功、成、て、い、ハ、日、山、あ、ら、せ、思、然、と、い、て、自、刃、せ  
り、大、輔、其、子、と、い、て、父、の、仇、あ、り、殘、念、か、く、の、如

人あはされハ、その老嫗を見らば、是らも張子  
房、韓の爲めに、漢を依り、秦楚をうす滅した、飄  
然として、大名の下に振らむ、志々これとも、あ不  
居氏に阿党し、その子、榮を思ひ、其、後世疑  
難の起る所あり、田植陶潜、義烈の卓きに志  
らむ、且大輔なり、高祿を受さず、か如きハ  
老のつね、作意にして、金本五言巻あり、子説  
の趣向、あるし、こ、高の主人、公はハ、犬士  
之、伏姫大輔等ハ、ハ士を引出せり、樸た、伏姫  
厚余云々、大輔、亦、厚余云々、おして、而、後ハ、ハ  
士、阿り、ハ士を生山のハ、伏姫ありて、ハ士を汲  
引す、よ山のハ、大之、志、うハ、ハ、こ、義烈の一

一婦一男ハ、ハ士の父母あり、父母か、人か、如く  
ハ、厚余に阿らされハ、ハ、犬士の後、榮、いづ、此、よ  
りの世人、金碗、氏、後、あし、とい、ハ、お、お、つ、う  
ハ、後、阿り、伏姫、子、あし、とい、ハ、共、お、お、つ、う、子  
阿り、その、金、編、滿、尾、の、後、あ、お、お、つ、う、子  
ハ、い、ハ、ハ、い、ま、た、う、お、つ、う、所、阿り、坂、看、官、を  
ヤ、今、ハ、つ、か、に、二、編、に、して、只、見、る、所、を、い、て、辨  
を、此、ハ、批評、の、疑、詞、を、その、お、お、つ、う、子、に、阿、ら、せ、  
よ、こ、本、好、き、之、を、ハ、ハ、ハ、と、問、之、地、事、阿り、大、輔  
ハ、尖、金、碗、ハ、郎、ハ、古、主、神、余、に、義、を、立、て、腹、切、た、り  
ハ、ハ、い、ふ、山、の、實、ハ、玉、梓、が、器、具、の、あ、る、所、あ、る  
ハ、し、妖、ハ、徳、に、勝、を、と、こ、そ、い、ふ、あ、る、に、さ、し、ら、る、

全碗八郎が、一女子の器によつて、自殺せしむ似  
言ふし、まゝて其子に高祿を度させしむ、よつ  
ねの作意之といはる、かゝる得かぶも、よの  
つねあらぬ作意と考ふる、あは、深き意味あり事  
歎

○ 疑ふこと、疑ふことへき事之、初編全碗孝者が  
自殺の段に、朦朧として玉梓が姿見えしとい  
ふ事、世にうへに贖し之、全碗いかに、淫  
婦の怨美に依り、自殺せしむる、あらんや、あ  
れ共、目眼ハ、玉石を得辨せ、寺時必候い、人  
全碗八郎賞祿を辭して、忽然と自刃せり、これ  
玉梓が崇之と、義美、智勇、良將とれし、此

○ 疑ふこと、疑ふことへき事之、初編全碗孝者が  
自殺の段に、朦朧として玉梓が姿見えしとい  
ふ事、世にうへに贖し之、全碗いかに、淫  
婦の怨美に依り、自殺せしむる、あらんや、あ  
れ共、目眼ハ、玉石を得辨せ、寺時必候い、人  
全碗八郎賞祿を辭して、忽然と自刃せり、これ  
玉梓が崇之と、義美、智勇、良將とれし、此  
疑ふこと、疑ふことへき事之、初編全碗孝者が  
自殺の段に、朦朧として玉梓が姿見えしとい  
ふ事、世にうへに贖し之、全碗いかに、淫  
婦の怨美に依り、自殺せしむる、あらんや、あ  
れ共、目眼ハ、玉石を得辨せ、寺時必候い、人  
全碗八郎賞祿を辭して、忽然と自刃せり、これ  
玉梓が崇之と、義美、智勇、良將とれし、此  
疑ふこと、疑ふことへき事之、初編全碗孝者が  
自殺の段に、朦朧として玉梓が姿見えしとい  
ふ事、世にうへに贖し之、全碗いかに、淫  
婦の怨美に依り、自殺せしむる、あらんや、あ  
れ共、目眼ハ、玉石を得辨せ、寺時必候い、人  
全碗八郎賞祿を辭して、忽然と自刃せり、これ  
玉梓が崇之と、義美、智勇、良將とれし、此

十子ハ、伏姫の事を思ひほそりて、長き病の床  
に臥し、伏姫ハ犬に侍れて、憂毎日を深山に送れ  
り、されハ母子の死際に、又一層の悲をまさせ人  
ハあまりの事あるべし、あハで死ぬる加あふ悲  
より、看官胸にうち摩りて、想像つハ感あかし、よ  
つて目録にも此段を、至上上巻に七、三、之、作者  
も定めて満足あるべし

**頭取**作者の用にまれし故、ちよと持株抄は、  
この段評し得てます、く、妙あり、評論の、一、  
本を、よて用心の空ありさるを、知れ、感服々々  
々、  
**志**くれとハ口上引

よ之本ぬき十二回、富山の段の幕あきから十四

田、伏姫の臨終まで、始終見物に胸を痛めさせ、  
泣事いあるま、と思ふ処に、又五十子の最後  
の注進、鬼のやうある筈さ、悔て、よ、あ、て、替、  
せぬ、あし、至上上巻ハ、相、  
あ、あ、  
**あ、あ、**

**評**あ、にひとつのおむづらしき事あり、ハ犬士也  
お出人起りに、犬の事ありて、伏姫腹をさけて云  
々、所、水、漸、傳、の、鼓、端、の、趣、を、筋、を、加、え、て、写、し、出、  
したる妙あり、その犬に高幸の故事を思ひよ  
せたるも妙之、これら悉皆妙あれと、山、その、肝、心、  
の、犬、ハ、い、づ、く、より、来、るといふに、玉、梓、が、器、魂、を、  
り、法、婦、の、煩、し、ま、心、より、犬、に、あ、り、て、里、見、丈、子、に、

恥を見せ、金碓史子に崇むる人聞えたる共、それ  
が八犬士の基にありたるいこ、り得かきし、伏  
姫ハ仙道に入り、その功德によりて、八房ハ善果  
得らる人、これハ前身ありし玉梓ハ、いけのし  
れたる淫婦あり、この淫婦のよほ処、遂に八人の  
勇士とありて、里見を佐るといふ事、いよく心  
得かたし、伏姫の功德にて、志うねき器をもちし  
成佛したり、おが玉梓に、相應ありし、こ  
れが、犬士の基本あり、いよくあり、あま  
里事毎にあそい、あく、五分も透あせ、と思ふ  
により、無理あり趣向、いひ来り、但、伏姫が、そ  
の氣を度け、る原ハ、玉梓の美子ハ、あれ、腹に花

由

したる母ハ、伏姫あれハ、その義烈に依りて、八犬  
士の出来あり、七女をけいハ、いハ、子一ハ、れと  
既に初編に、伏姫福祿の中あり、さき、仙翁が言  
葉に、玉梓が崇むるへき事を喻し、後にハ、又福の  
あるへき事を示し、又二編に至りて、仙童が辞ハ、玉  
梓が專文のやうに聞えたり、これによりて、看官  
十の三四ハ、これに等しき疑あらん歟、爰ハ一言  
伏姫に、憤激の言葉あせ、よ、や、此身ハ、恥  
き、死をあすとして、も、後竟に、家ハ、さけ、子と、さ  
やハ、あ、い、ふ、と、あ、ハ、ハ、犬士の伏姫の義烈に  
よ、て、化生し、と、あ、ま、か、に、聞、せ、し、柳八房の

大の事には、八犬傳の基本として、尤大事の物あり  
に、うち見えてあり、不圖かく思はる、事いふれど、  
これ將例の作者に、ぬかすあるべき筈にあり、そ  
おのゝ、山悉考へる事あるべき歟、容易に批  
判しかたし、こゝ衆議判して定め人あり、作者の  
答を聞くべきを、當場に疵をつけんハ、心なき  
でござんぬ、思ひしとを漏さばとて、誠しにこれ  
をいふり、亦是作者に笑れん歟、  
園地評の辞、そのよゝある、寔によゝ山見ふれ  
たり、かくいふは、誇りに似て、心裏をうけし  
わざあり、若、さし心答申さし、とて、  
文圃に、假話あり、文外に話説あり、これを見ふ

やまるときハ、その評者も、抑傳記稗説ハ、實  
録といふより、あて、話後に倚伏を專文と共、譬  
に水滸傳の一百八人ハ、天園地煞の魔君之、こ  
のらか人間に出現したる、秀体ハ、亦罪犯刑餘  
の人にて、群盜あり、志々れと山その志おのつ  
る、義烈あり、彼蔡京、童貫、萬俣卣、倭奸毒害の  
類にあらば、出、か作者の用心、第一あるよし  
ハ、人におしれり、八犬士の基本ハ、その心構ハ、  
其これにおおし、百八賊の賊たるハ、大面の假  
話ニ、彼等が心構に、本照の善悪ハ、作者の眞  
面目ニ、只見ると、評されハ、世を弄ぶ、依を  
証する、罪作者たり、退きて、文外の意味を思

一は、宋の徽宗帝の時、改いたく乱れて、奸黨旌  
を弄し、小人君子を刻すに好し、賊中に義士何  
り、衣冠に賊有り、これ戒むる所、一は、水滸を  
見相せず、呂管  
一は、宋の徽宗帝の時、改いたく乱れて、奸黨旌  
を弄し、小人君子を刻すに好し、賊中に義士何  
り、衣冠に賊有り、これ戒むる所、一は、水滸を  
見相せず、呂管  
宋公明を、巨盗と見て評せし故に、九天玄女が、  
天高を宋江に授る段に至りて、評窮れり、こゝハ  
魚盆の糸多れと云、水滸の發端を取出て、八士  
の基かを評せし事、あり、まづ此大意を述  
ぶのこゝ、されば、批評の玉人、玉梓は、その不義さ  
ふに論をべし、山阿小を、その悪報を、八房の  
犬にまをさるゝ、佛説の因果輪廻の義あり、水  
滸の魔君といふ細小のし、これ、かくて

由

犬は、はかハ、まゝさるゝ、こゝ上の節やある、其の  
らハ、玉梓が、自業自得の悪報に、去、お尽せり、  
玉梓既に、八房の犬にちりて、八里見に印あり、  
莊周が、胡蝶の論をもていひ、八房のおかづ  
う、おさるゝ八房にて、玉梓に、山阿小を、既に八  
房が、玉梓あることを、知らぬ心、誰のよく之れ  
を弄し、人、そのま、その義實ハ、犬の大切を賞ま  
るあまり、伏姫をさへ評せしり、口より出たる  
禍にて、この禍あきとき、安西を喊して、虫房  
一國のまに、ある福、一糸、かたし、犬に愛めを  
聖世人といひ、禍又一轉して、八犬士出現し、  
竟に里見の佐とあること、彼塞翁が馬に似た

り、是を名つけて倚伏といふ、又彼水滸傳の發  
端に、昔大尉か悞て魔玉<sup>王</sup>を走らせし禍は、一百  
一人の豪傑出現して、國の福とある(べき)之、志  
かるに倭臣、これを用ふる正を志らば、還害せ人  
とせしむるに、義士を賊中よ走し、こゝに  
至て、順逆の教あまが如し、こゝ水順逆の義あま  
あつ、あらす、賢と不肖と、忠義と非道と、その位  
をかえらるあり、かくて水滸傳の作者、彼一  
人、魔玉に比せしに、深意あり、か此ら加忠  
義の、聖人の道に齟齬を磨く、わ説に、勸懲教  
誨の意味、阿れ昔、經史の史とあふものあるこ  
こを、し、出、を、山、て、賊中の義士を魔玉とせしむる

こゝ、あ、不、説、中、七、教、誨、也、昔、言、と、在、る、か、如、し、  
八、房、を、玉、梓、が、後、身、と、い、ふ、も、し、火、亦、こ、れ、と  
相、同、し、正、史、実、録、を、流、む、眼、睛、を、板、替、す、に、野、史、  
小、説、を、南、を、北、に、作、者、の、体、面、を、見、が、た、し、と、古  
人、の、云、ふ、り、お、う、に、彼、も、玉、梓、が、崇、之、と、此、も  
玉、梓、が、崇、之、と、毎、事、に、正、り、し、は、伏、姫、孝、に、  
て、賢、義、に、し、て、漁、お、も、さ、る、正、を、こ、の、福、を、受  
せ、せ、人、の、勸、懲、殊、と、る、に、似、たり、故、に、そ、の、崇、を  
い、ふ、也、の、は、文、雨、の、假、話、之、本、來、の、雨、目、の、あ  
ら、ず、又、伏、姫、の、大、の、氣、を、磨、り、て、學、ぶ、を、履、か、  
り、ふ、肚、を、裂、に、及、び、て、恥、あ、ま、を、歡、や、り、後、々、の  
事、に、上、に、思、ひ、め、く、ら、す、に、違、阿、し、かし、批評



の正く、それ死して、里見の家には、何れも世人  
と、いひ、羞し死すこと、外にあるし、  
たゞ、ことと、す、八士、出現、八房の犬  
より、起ると、いひ、その印徳、伏姫と大輔  
に、阿り、さうを、お、よ、玉梓が、掌を、尋く、  
おれ、伏姫の、印、お、れ、を、これ、文、面、の、假、託、  
文、外、の、話、説、あり、又、大輔、の、居、余、と、伏姫、の、枉、死、  
と、一、對、あり、その、生、徒、男、女、り、全、碗、人、郎、が、弄、死、  
と、五、十、子、の、方、化、曼、死、と、一、對、し、この、生、徒、男、女、  
ハ、造、悪、の、こと、と、し、皆、善、果、の、人、た、る、へ、ま、上、に、お、  
く、あり、果、する、子、の、原、を、玉梓が、掌、と、いひ、お、ハ、  
何、を、よ、て、勸、懲、と、せ、人、玉梓が、掌、ハ、義、實、彼、を、教

州、ん、と、し、て、得、教、さ、ず、只、一、言、の、失、り、出、り、そ  
の、應、報、伏、姫、を、犬、に、許、せ、し、戲、言、に、お、れ、は、彼、と  
此、と、む、ら、へ、て、見、る、つ、し、亦、一、言、の、失、に、お、れ、は、  
や、彼、は、考、上、口、通、と、い、ひ、お、れ、は、元、來、犬、と、  
懲、に、い、お、れ、は、志、する、に、其、業、の、大、お、れ、は、何、を  
や、後、に、里、見、に、八、士、を、得、て、地、を、開、き、鄰、國、を、併  
す、福、と、お、れ、は、大、お、れ、は、志、する、に、其、業、の、大、お、れ、は、  
大、お、れ、は、生、せ、に、審、に、見、る、と、ま、し、  
伏、姫、母、子、と、全、碗、丈、子、が、切、徳、より、出、て、來、る、と、  
の、之、この、所、作、意、の、秘、鍵、に、し、て、筆、も、て、その、よ  
非、を、斬、り、お、れ、は、知、音、を、候、に、あり、か、く、い、い、入  
と、し、後、の、編、遺、り、お、れ、は、見、果、す、の、神、あり、ね、い、

いゝる、処無理あらす、強て弁を為すときハ、  
非を飾るに似れ、人歟、取捨おのく、あ、ろ  
ふある、し、

評第十五回、金蓮寺の仇撃、北華庵の奇稲、さし  
て評去、き事形し、但此卷より下、も下めて、大  
士の生立を説出せ、及ひて、初編、一回あり、結  
城、戦う、飯にか、して見せ、趣向、人の思ひ  
か、け、所、水、澗、傳、の、發、端、に、魔、界、を、走、ら、せ、その  
、ち、途、に、年、を、経、て、一、百、八、人、処、に、出、生、し、お、の  
く、既に、人、と、ち、り、この、台、より、して、写、出、せ、し、趣、を  
か、え、たる、神、出、鬼、没、の、奇、才、とい、う、し、就、中、番  
作、手、束、幕、台、篋、箒、が、人、品、勤、作、面、見、る、が、如、し、第

十七回、末、半、束、が、庚、申、塚、で、子、種、を、得、る  
処、伏、姫、の、神、灵、よ、め、つ、子、の、如、く、妻、哉、と、い、ふ、  
者、の、事、と、く、又、其、子、の、ゆ、く、を、忍、ぶ、と、い、ふ、  
を、三、玉、を、投、ぎ、し、の、い、ふ、て、伏、姫、と、い、ふ、何、と、い、ふ、  
の、事、と、て、看、官、に、伏、姫、あ、る、正、を、預、り、し、何、意、が、  
し、ら、し、又、その、玉、を、与、四、郎、犬、が、吞、む、る、を、其、処、  
で、八、割、の、ら、を、後、に、大、を、破、し、と、き、玉、の、由、来、を、  
き、あ、ら、せ、し、奇、事、あり、又、類、藏、の、玉、の、出、所、  
異、なり、お、ま、し、節、の、玉、を、い、ろ、く、と、い、ふ、  
したり、定、めて、後、に、出、る、古、犬、士、の、玉、の、出、所、  
ろ、く、あ、る、し、よ、く、心、を、用、ひ、た、る、も、あ、  
る、  
因、玉、の、出、処、お、の、く、其、趣、を、か、え、人、と、い、ふ、

ひさし、あ、ら、尤、和、新、の、場、あ、り、作、者、の、名、心  
を、志、す、人、あ、ら、わ、り、評、言、い、ら、せ、か、こ、に、至、ら  
ん、よ、く、見、る、人、大、概、別、に、あ、る、と、い、ふ、事、は、出、た、り、  
國、大、塚、信、乃、ハ、初、編、の、端、像、に、出、せ、り、ヒ、ハ、真、の、女  
子、と、見、や、ら、り、今、二、人、毛、野、と、か、い、し、見、ゆ、女、子  
と、見、え、たり、今、こ、の、二、編、に、至、り、ハ、信、乃、を、假、に  
女、子、に、志、たり、且、れ、ウ、ハ、大、塚、の、実、録、を、見、ゆ、ま、る  
あ、し、先、年、合、類、節、用、集、と、か、い、し、ゆ、の、に、ハ、其、の、姓  
名、を、志、す、と、い、へ、と、也、今、ハ、大、塚、と、志、れ、たり、ハ、大  
塚、と、い、へ、其、皆、あ、る、マ、キ、歟、女、武、者、も、何、り、し、や、  
本、信、を、知、ら、ず、れ、ハ、い、ひ、か、た、き、事、あ、り、昔、作、者、の  
自、序、に、も、本、信、評、と、い、ふ、事、と、い、へ、り、志、す、事、ハ、此、列

傳、の、亦、一、番、に、大、塚、信、乃、を、出、さ、せ、と、也、姑、あ、か、さ  
へ、き、に、前、編、の、端、像、に、ハ、真、の、女、子、と、見、え、た、る、信  
乃、を、一、番、に、取、出、し、實、ハ、男、子、と、し、け、る、を、假、に、女  
子、に、志、す、と、い、ふ、事、ハ、何、意、い、と、い、ふ、事、ハ、素、ま  
り、か、ら、る、趣、向、あ、り、し、也、也、し、ハ、二、編、の、構、思、に、ま  
り、め、づ、ら、し、き、る、極、也、信、乃、を、志、す、に、写、出、し、端  
像、の、女、子、に、あ、ら、せ、人、と、い、ふ、か、く、い、た、人、と、志、した  
子、山、の、歎、是、に、よ、つ、て、見、る、と、き、ハ、毛、野、也、實、ハ、男  
子、と、い、ふ、人、歟、然、る、と、き、ハ、趣、お、あ、ら、ず、あ、ら、  
ん、毛、野、負、の、女、子、と、い、ハ、信、乃、を、女、子、と、志、す、也、姑  
あ、り、る、し、こ、の、信、乃、を、假、女、子、に、し、き、る、ハ、本、傳  
に、よ、つ、て、の、事、歟、か、一、志、か、一、志、也、い、お、か、し、き、事

乙、  
この段の批評は、  
入りかたの二編の附言に  
初編の端に、  
聊思ふまじりて、  
野をバ、  
を人土列傳、  
奔傳詳ふを、  
丈夫也、  
男に在之、  
世に、  
画登の趣向といはる、  
ハ、  
イ、  
またハ士

由

の奥の所以を、  
梓の毒婦の、  
姫の賢女に、  
を趣向とせり、  
子女子に、  
子の氣質あるを、  
て列傳の、  
男子に、  
写出さず、  
や、  
かその子を、  
し、  
初編の

何れと、二編に亦与四郎何れ、女と云う子さき  
やうなれと云、与四郎大を出家、此の信乃在  
女子に頼せし、意を曉らす、由何れを、伏姫の  
神具と、与四郎大を切けて見、信乃の女子と  
して女子にあふぬ、事の心、知る、人、又与  
四郎、八房が、後身といふ、されども、其処子と  
曉り易ある、一し、この大の事、上就て、其、  
之の趣向何れ共、このよ、樂屋に見せかたし  
里ち我ふ人、聞け、何程道理至極、これか、少の  
新板、う、く、と流下、ハ、お、何れ、何れ、若、  
う、も、志、れ、ぬ、よ、本、好、き、三、の、卷、十、二、回、番、作、夫  
婦、か、大、塚、へ、来、て、暮、合、毫、降、か、為、休、う、傳、聞、思、望、を

失ひて、云々といふ、おこり、ハ、読、て、由、ち、り、少、か、  
る、や、う、と、又、四、の、卷、十、七、回、暮、合、夫、婦、か、養、女、を、  
取、り、既、に、暮、合、い、よ、く、見、た、も、ハ、お、て、よ、地、子、を、  
あ、り、れ、物、と、い、ふ、女、人、と、袂、へ、垢、手、を、差、し、入、れ、て、  
り、出、を、果、子、の、花、も、い、ち、実、あ、ふ、ぬ、親、と、い、ら、ぬ、子  
も、さ、す、が、口、に、ハ、孝、行、に、て、朝、四、暮、三、の、様、鑑、ら、り  
こ、る、如、く、泣、止、い、け、り、と、ハ、飽、迄、筆、の、ま、い、ま、し、  
稽、外、に、ま、手、手、い、ち、お、ぞ、く、  
四、番、作、の、目、殺、ハ、誠、に、苦、肉、の、計、あ、ふ、人、と、い、ふ、れ、若  
今、少、し、計、策、あ、る、よ、ま、に、日、来、に、ハ、似、か、短、慮、至  
極、相、手、ハ、癡、と、い、ふ、人、あり、是、牛、刀、の、鑿、に、似、たり  
離、に、兵、を、籍、山、の、歌、猶、二、編、の、出、た、ふ、ハ、こ、の、疑、い

解へき次

國者作か自殺するを、苦肉の計といふつるは、  
見る処のまゝにして、苦肉の計の心は阿ふに、  
又暮言龜符か、病に死するに阿ふに、その子  
為に死するに、死するの事に死するハ、計あり  
といふと、此拙きに似たりと思ふハ、只うち見  
こるうへのみして、計たれたるを、人氣ハ、  
れと、想像や、故あるし、狂子骨を棄せて江  
を渡し、疑れて入水せし、彼江上の漢夫人の玉  
き、秦平の老をよて見れハ、醉狂やして、馬鹿  
々し、ふたや、然れとも、義信を守り、疑念を厭  
ひ、偏に仁侠をよて、死して潔とする山のハ、

國の人氣あり、况番作ハ、智勇の士あり、その身  
重振に墮りて、起つたきを知れり、且その子  
少年にして、養ふべきに、婦と婦夫の奸  
あるは、よくあつたり、番作ハ、氣質を推し、死す  
ることを得たるへし、秦平の老の人あらハ、番  
作といふと、此自殺をへおふを、金碗八郎が自  
殺也、亦これに相おし、八郎ハ、古生の為に死し、  
番作ハ、其子の為に死す、彼の義烈あり、これハ  
慈愛あり、彼の公道あり、これハ、人情あり、鷄の  
為に、牛刀を用るといふや、あふを、暮言龜符を  
敵手にして、死するにあふさるよしハ、番作既  
に、渠等ハ、胸中を、悉見ぬきたるよて、知りてへ

き次

評信乃が与四郎犬を斫て、玉を得たることハ、よ  
 くも考たるものか、与四郎ハ、大塚親子が年未  
 穉愛する犬之、これを生の手つゝ、斫り人、事難  
 りと、し、さほ者犬ハ、暮云に刺れ、深手を負ひ  
 し折、信乃ハ、丈の自殺をりおし、其を身共  
 死んとするに、犬を養ふか、教人正を思ひ、た  
 り、さし口也、加手にか、けんとして、与四郎を斫り  
 及、ひて、思はず、玉を得たり、かくて、自害を、急  
 等上禁められ、丈の遺言を思ひ、出して、遂に、其死  
 をと、いま、あとの事、みよ、不意に出たる如く、無理  
 あり、趣向絶て、あし、第三卷あり、下ハ、犬士の子に

ありて、この段を、抜萃とを、し

評信乃が、評ハ、因に、作者の胸臆を、穿得て、妙あり、  
 也、か、乃の子期、あ、と、何り、也、か、乃の子期、あ、と、  
 り、り、

評信乃が、評ハ、因に、作者の胸臆を、穿得て、妙あり、  
 也、か、乃の子期、あ、と、何り、也、か、乃の子期、あ、と、  
 り、り、  
 評信乃が、評ハ、因に、作者の胸臆を、穿得て、妙あり、  
 也、か、乃の子期、あ、と、何り、也、か、乃の子期、あ、と、  
 り、り、  
 評信乃が、評ハ、因に、作者の胸臆を、穿得て、妙あり、  
 也、か、乃の子期、あ、と、何り、也、か、乃の子期、あ、と、  
 り、り、  
 評信乃が、評ハ、因に、作者の胸臆を、穿得て、妙あり、  
 也、か、乃の子期、あ、と、何り、也、か、乃の子期、あ、と、  
 り、り、

此でハ整まやみやうに、再思ふに、やむり大士中  
の豪傑ある一き奴、虎の形を見ずとも、猪と  
いふ事誰もあれど、是もかりハ三編の、初巻を見  
れば、評の志がたし。

園足音の推評ハ、尤作者の秘事あれハ、只今ハ  
分解し加たし、走へて此ニ編の評ハ、聊カ理屈  
なし、初編の評に比れば、感嘆、改作の少きこれ  
を、あ不解由のハ、高人ハ、セカ賣物ハ、セろきハ  
よしといふが如し、批評ハ、磨ミ、作者ハ、世ハ、  
り、みづらぐ拙しと、走るときハ、株板に拍子ハ  
き、板元の為あれハ、思ハ、道言ハ、四蔵の、心や  
まぐてと、やるハ、玉ひね。

由

評作り物語の右編ハ、見おとりせし、そのあ  
るにこの人の作むかり、前編まりハ、猶後編々々  
よりあ不三編と、人のまつと亦奇ハ、三編いまた  
出されハ、この書ハ、異評ハ、これまで、  
を、以て、  
頭取 諸是りハ、朝身の評判、  
大せい

由

評作り物語の右編ハ、見おとりせし、そのあ  
るにこの人の作むかり、前編まりハ、猶後編々々  
よりあ不三編と、人のまつと亦奇ハ、三編いまた  
出されハ、この書ハ、異評ハ、これまで、  
を、以て、  
頭取 諸是りハ、朝身の評判、  
大せい



評者の筆端不測趣向に自由自在を得  
られしよしをいふに朝夷の事趣相似  
たるものこゝ編の聊も張月に類  
することあり朝夷の人品と朝夷の人とあり  
書ぎぬ十やて親下あふを慶一か為朝の堂に  
り朝夷の堂あり今も説きととこり北西  
雄ハ共借和北後胤と此朝夷の和田義盛  
に養はれて旭将軍の二孫胤といふ事頭れをこれ

大夷評判記下之巻

曲亭馬琴文述

操亭琴漢

批評

朝夷巡島記初編

評者此作者の筆端不測趣向に自由自在を得  
られしよしをいふに朝夷の事趣相似  
たるものこゝ編の聊も張月に類  
することあり朝夷の人品と朝夷の人とあり  
書ぎぬ十やて親下あふを慶一か為朝の堂に  
り朝夷の堂あり今も説きととこり北西  
雄ハ共借和北後胤と此朝夷の和田義盛  
に養はれて旭将軍の二孫胤といふ事頭れをこれ

在為朝に比れ、その家扶有れり、よくこの品を  
書りたり、自由自在の筆といふべし、初めによ  
りて後を思ふに、嶋もたり、力事も出ぬ、弓張月也  
異なりて、定め、新考の深設あり、板行年にも  
懈怠なく、老やく金本よりて見よ、いよのこ、さて  
後端粟津の原の段にハ、さして評き、まき正あり、  
但事つ、盛衰記のま、いよ、花やかに書れり、  
文辞のあ、那し、佳と見せあるに、その中に頼田の  
り、照に凍解る、残雪の飛衣、落葉、中略、あ、あ、便あり  
と、夕、同、暮、見、あ、る、境、の、星、月、夜、墮、石、田、加、藤、つ  
箭、にあ、と、い、お、り、り、緩、初、巻、半、丁、に、在、り、か、く、の  
如く、短、文、何、り、五、の、巻、を、悉、く、か、こ、へ、出、入、り、あ、り

く、あ、る、へ、し、**ま**ま、せ、て、**聞**人、あ、る、程、其、様、を、正、し、  
あ、つ、り、つ、け、へ、  
**評**第二條に、鞞、画、弄、盛、が、毒、に、あ、り、て、**擇**を、破、ら、を、  
あ、り、し、遺、腹、の、全、く、し、我、に、ま、り、て、自、殺、せ、し、我、  
烈、の、あ、ま、さ、い、は、ま、り、て、妙、ち、り、こ、の、場、の、ま、ま、り、  
勇、婦、の、烈、し、き、中、に、思、愛、の、切、あ、る、事、情、あ、ら、い、れ、  
て、感、ふ、か、し、最、初、に、此、一、條、を、読、れ、ハ、多、分、せ、ざ、る、  
し、の、ま、し、也、**老**後、に、厄、と、あ、り、て、**信**濃、に、隠、れ、た、  
る、よ、し、**盛**衰、記、に、此、一、説、を、奉、て、こ、の、事、何、り、又、世、  
に、巴、か、矢、あ、ら、い、お、し、の、山、ゆ、り、あ、ら、る、を、その、巴、  
の、厄、を、ハ、**梨**手、よ、り、て、**真**の、巴、ハ、老、やく、節、義、に、自、  
殺、せ、て、その、勇、敢、と、剛、毅、と、を、二、人、よ、り、ま、り、け、た、

らぬあり、巴の粟津合戦の詔、再び出たりて、終を  
木曾に取らば論ありし、和田城への再渡の夢を、鎌  
倉に見果すハ、よトや厄にちてぬといふとし、烈  
婦といひてかたし、さ勝をか二人にしたるハ、  
歎ありむや、巴ありし直うちを付、折ハ朝夷の  
直うちにか、いれはあまゝし

評し得て妙

評 血字の遺書、僅に数字にして、よく朝夷の生涯  
を、正せしめたる、亦妙なり、よ、よハ朝夷を、文武  
の英士に仕立たり、これハ此事あるとし、みり  
子、逆亂を思ひ企てき、何れハ、又玉の巻、評我ハ  
既に、秀作が議論、教訓を語り、然れども猶假初子

ハ鎌倉殿の子仕へんハ、あ、万まからぬ所あり、さ  
ハ仕の途ハ、進んで、世外の人とあふむ、世  
ハ議論も、暇水か、いけ人、おれり、よしをよく考  
て、ちやく此遺書トて、正せしめ、る、實ト妙、こ  
ハ遺書ト、秀作が教訓ありて、朝夷後に、鎌倉ト奉  
仕、くらんにハ、文武の英士といひ、か、いし、その  
行状も、見、に足らず、よ、よハ、母子草の一段  
ハ、一部の家口、よ、よハ、た、い、形、し、る、山、か、あ、こ  
れ、初編の、抜萃と、よ、よハ、し、か、一、巻、か、へ、む、也、奇、ト  
妙、ハ

評し得て亦妙

評 梨子阿三丸を、若負つ、走、走、去、ら、人、と、を、る、奉

に、縛急上りて、介抱に、違ちけれ、そ加ま、上、背  
に、負つ、揺揚て、彼、白旗を、背手、上、投、掛て、引、繞うし、  
涙を、手、向、云々、といふ、あ、こり、勢、何りて、よ、け、れ  
と、山、血、字、の、遺、書、ある、白旗を、去、り、いて、か、り、物  
の、せ、り、ち、と、麻、未、ある、志、り、こ、こ、の、旗、の、懐、の  
志、り、と、緋、さ、せ、こ、き、由、り、と、去、り、し、か、り、立、ま、せ  
り、ハ、常、に、雜、劇、に、阿、る、正、で、か、く、せ、が、れ、ハ、そ、の  
形、勢、烈、く、聞、え、ぬ、り、忍、あ、る、し、こ、の、段、切、ハ、秋  
津、島、ハ、重、桐、の、傍、り、あ、り、れ、に、く、又、澤、人、志、り  
ル、見、物、を、觀、は、る、老、切、ハ、さ、あ、る、か、あ、  
因、か、こ、ま、下、り、む、ゆ、し、折、記、念、の、白、旗、を、懐、に、  
緋、人、事、の、あ、お、ふ、き、せ、が、こ、こ、の、事、實、に、は、る、こ

て、心、利、の、婦、人、あ、ハ、懐、ハ、緋、む、ハ、か、少  
を、去、て、重、存、を、負、お、し、き、に、勤、む、を、れ、ハ、懐、中  
あ、る、物、を、遺、を、ハ、今、あ、る、こ、こ、と、さ、れ、ハ、こ、こ、で、是  
を、去、こ、い、て、鉢、巻、に、せ、は、長、途、人、且、暗、が、着、ハ  
し、或、ハ、引、結、で、禱、に、り、け、人、も、不、用、あり、又、腰、帶  
に、せ、ハ、い、よ、く、矢、致、し、い、ハ、此、人、素、より、婦、人  
の、と、あ、れ、ハ、情、鼻、禱、に、い、ま、で、人、も、あ、ら、な、今、般  
ハ、母、の、魂、を、籠、た、る、記、念、の、旗、を、も、て、負、る、そ、の  
子、を、括、り、浴、し、ハ、母、の、擁、護、を、浴、し、之、を、れ、ハ、又  
野、島、に、て、危、箭、の、と、き、鞆、繪、ハ、神、美、其、子、に、憑、り、  
駒、の、足、手、を、投、懲、せ、し、と、此、彼、を、む、り、て、見、る  
ハ、し、記、念、の、旗、を、わ、り、物、り、野、島、の、危、箭、に、解

世人爲之、故ちして好んせし。其のあふま、この  
一條、見換られしり、阿三丸、獸ををらまへて、母の自  
誣野島の段、阿三丸、獸ををらまへて、母の自  
殺し、其故あるに、今又父の使を阻て、不孝を醜  
へ、山阿小ねと、云々といふ處、志眼者といひて見  
る、し巴が其子阿三丸をりて、見物にいひしむ  
るあり、柳朝夷、その武勇拔群ありと、只那田加三  
男にて成長せし、所云若孫育てお山し  
わら木、貧家に養はれて、その二親上者を忌し、仇  
を撃、怒を報ふ、一人、他抑の者となり、予辛万苦、麿  
を一株、瘦梅よく、雪霜の積がを得て、更上色香  
をませ、子が好し、よくたく、形したる、山の之、ガ

にかん、青め、ふりし、わがで、ハ、彼敷を、手取り、上  
る、実録の、おこり、まで、綴り、あること、あかるし  
さて、北安房に、退きたる、一件の、事を、思ふに、巴阿  
三丸が、房に、正日、あり、と、我威が、いひ、理  
り、あま、いひ、いふ、を、二の、巻上、あり、威阿三丸が  
事を、聞て、志、いらく、棄て、再會を、待んといひ、又同  
巻、浦黄の、編の、ま、つめ、に、あ、威阿三丸が、伯く、へ  
を、想像と、ありて、云々と思ふ、おりに、まか、さく  
心、あまた、う、年を、送、けり、といひ、些、不、喜、悲、日、ハ、阿  
ら、さる、か、縦、母、巴が、美、の、憑、を、守、り、と、いひ、  
それ、に、任、て、外、子、の、密、に、心、を、添、や、り、し、ハ、我、威  
あり、誰、より、い、あ、ハ、作者、の、手、ぬ、か、ま、か、と、い、ハ、い

ふも、和田より見えがこれに附人ありてハ、  
彼若中若を喫する、倉家の敗走ありし、去々  
此ハ作者も去々のあく、和田か手ぬか屋にした  
山の宛、定めて佐々の巻にて、親の再會の日、  
この手ぬかりを解事何人、あ、よこ去々とい  
評しかこし、

○腰越獸らが逃こか、りしとき、義盛の所三  
凡に、鞆繪々其の憑ト之圃ニ、かさねて追手を  
遣さず、その行方にも幸おしし、義盛の気質  
幸より技断あく、狐疑ふりきによつてあり、  
し狐疑の心あく、鞆繪に自殺すべり、  
又未断を取ると速あらハ、連保の戦ひに、敗死

まべのふを、まづよく義盛の言行に、心を収て  
見おれよ、後々の編に至り、おのふ氷解  
を、し、

○二の巻、児櫻の編に、葉手豊云に所を丸が事を  
おちもあく物が、くるとあり、木曾の胤あるよし  
ハ、あ不告ざりしか、そのつひの文に、素姓を問  
へハ、在鎌倉に、一二を争ふ武家の郎君、云々とい  
豊云が後あり、おちるに又四の巻の四下のお上  
これを見よ、二親の賢ひか手し借金を債する、  
ちり桶くるとしく、うまてやあ世とて時とて、木曾  
殿の藤胤、三浦黨のやしあひ子、於といふ、  
ひ、云々といふ文あり、さでハ、豊云見、木曾殿の藤

亂といふを知らざるや、二親も河に、あ  
おがち豊右の子の、かけこいおにも河に、あ  
子、然木曾の、亂といふ事を、志らせむ、  
栗手が、駿の、飯に、云々の事む、か、夫下、告  
お、し、あ、と、云、河、つし、あ、れ、は、も、こ、の、事、は、初  
ありして、栗手が、夫に、告、て、か、あ、は、ぬ、さ、は、ち、り、  
豊右が、気性を、推せ、こ、れ、を、告、ると、は、善、あ、ま、り、  
勿論あり、

阿三丸も、金藏、お、と、上、快、気、の、こ、も、こ、は、藤、骨、あ  
かしを、く、を、よ、し、と、也、初、り、栗、手、が、木、曾、の、事  
を、豊、右、に、告、む、に、あ、し、サ、鞆、繪、が、遺、言、あり、と、也  
阿三丸も、金藏、お、と、上、快、気、の、こ、も、こ、は、藤、骨、あ

るべし、豊右に告ると、又告ると、は、卷々を  
流して、あり、に、お、の、つ、の、さ、知、ら、る、一、也、原、是、秘  
密の、情、由、河、に、は、筆、山、と、し、り、と、ハ、五、七、八、九、  
山、ある、上、手、の、お、説、に、か、い、る、事、お、る、上、往、々  
こ、れ、あり、さ、ま、あ、あ、今、の、草、紙、物、語、を、う、人、ま  
て、つ、し、く、見、ら、る、と、こ、の、人、の、外、稀、ある、  
し、お、説、を、お、斯、の、如、し、況、実、録、を、や、讀、史、の、才、推  
て、あ、り、し、

評二の卷に、榎田秀作が、阿三郎に、教訓の一段、  
真に、確論、を、あ、ら、孫、子、の、兵、法、を、お、を、お、説、む、そ  
の、議、論、性、を、あ、ら、こ、れ、に、強、耳、に、も、か、り、や、也  
し、鞍、馬、八、流、の、他、劍、術、の、奥、旨、と、い、ふ、も、の、ハ、考

人禪法に似たりと聞けり、これを宗として、又七  
書の義を失ひて、こゝろをよめ、見よや山ろ  
く

**答** 彦美願ふ分は追きたり、類の汗を拭ふの意、

又唯天狗に如し人歟

**評** この秀作、佐といふ名、衆議より、俗稱を何とか  
して、実名を秀何とせり、世に、後に朝夷が、若の一字  
を取り、ト山よるる心し、

**答** 是に評言の如く、すも山よし、忘られしは、我  
秀の秀の字の、敢秀作の一字を、乞取まし、ト阿  
ふむ、朝夷が云々といひし、此當座の探掇め、  
秀作が実名を知らざりし、世を避けた

る田舎浪人のさばを写せし、之、実名有り、とせ  
るまに、何ら如と、名氏をかくとして、その才を  
重くせむに、始終世にあがらんと見え、かこ  
し、

**評** 蒲黄の巻に、我盛管中に事ありと聞て、いそぎ  
馳まゐるに、佐々木島山以下誰かれ、まや學問を  
守護せしよし、いへり、我盛の彦彦、心得が、こ  
の処、又面のこと、いひ、あか、この物、後子、我  
盛を、方一番に馳つらせし、ちり、待所の別者  
あり、又実録より、このとき、我盛、一番に馳つき、  
よよし、見えたり、

**因** 我盛人に先まちて、得まおらざりし趣に、作



とあしたるら、この人は断なく、根疑なきよし  
を手にのし、かむりの正にも、此心を用ひさ  
れば、その人の性質、始終と得るを、皆是達保敗  
死の張本と見えし

評蒲殿の一事、まどめあり終まで、さらばいふ  
き事なし、大かゝい実録に新考を加へ、本末よく  
と得りて妙あり、權通評定の序よりこの後論、蒲殿  
今般の遺懐おとを借りて、北条が老奸を論し、武  
衛の失策を評したり、これらハをやく古人の論  
に置ける事あかす、權通に述させ、範頼に似せ  
る、いと似つゝいしくてよし、その中に、範頼の  
臨終に、頼家の事までをいハせし、あまりにけ

井やけく聞々、今次しお不るげにいハせて、諸地  
の文章上、果せりかお後年、云々とありし  
園評し得て再佳、さりてふ、此物後にてハ、蒲  
殿、殊さらの癡人あり、實録の上より、山、才あ  
る人ト何ふされと也、又させる好山あし、せぬ  
て其臨終に、神加ましきとをいせし、則作  
者、老姿心、頼頼を即けりる、よし此格言さ  
きときつ、義邦の相場が立屯、義秀、義邦、甲乙  
その丈母に依て、價をさふめたる正、前の評の  
如し、

評廣通舟九郎を撃て、播多の方より育を得つる段  
に、覆面したりとほり、こゝの文面にてハ、よく

取合せこゝやうあれども、縁に一丁隔二、廣通が、  
蒲殿に物々たる処に合され、この覆面亦し不都  
合に聞か、いかにとあれ、廣通の中途より引  
へして、鐘の焼くる処、馳つけまゝやす之、か  
ちてより用意せ、若の公座に覆面して、  
つらまきやうあし、但、お、上様まき余あふ、云  
々といふ、廣通が言葉、思案、何して、即座に  
覆面して、立去のひきりと見ん、子細あり、  
き、此この様、ま余あふ、何とい、蒲殿の先途を見  
ん、あふ、し、白鳩丸、既に、弟廣通、托した、  
嘴多の方の、又、心にか、さ、し、忘、く、其  
月より、立去の、何、い、何、い、ね、と、覆

由

面、些、お、め、進、きたるやう、  
い、あ、の、繡、繪、を、異、なる、打、珍、ある、に、あり、疑、念、の  
貴、は、娯、と、つ、あ、り、只、か、る、く、立、忍、び、たり、と、見、ん  
あ、つ、難、あ、る、し、只、張、月、の、所、磔、を、自、縫、の、危  
急、を、救、ふ、段、竹、藪、より、磔、を、打、つ、あ、り、れ、出、又  
この、芽、二、編、に、朝、夷、が、廣、通、の、凶、死、を、救、ふ、と、あ、る  
た、と、さ、て、そ、の、場、の、相、子、を、い、は、る、し、  
周、廣、通、既、に、鉢、の、変、を、聞、て、引、く、へ、せ、心、塵、の、内  
に、入、る、へ、り、お、を、覆、面、と、い、い、心、手、拭、して、面  
を、毛、を、い、る、し、覆、面、を、り、忍、案、と、い、い、心、装、束、を  
て、打、覆、ひ、て、山、去、の、心、に、相、形、を、か、り、入、し、出  
像、に、黒、き、衣、服、頭、巾、を、被、ら、せ、り、  
彼、歌、舞、伎

狂言ある、是衣とかいふものを探せよのこ、  
心て出像、作者の面目にふくむを、画をよこす  
に及不し、且その作者を難せられん、些うら  
みあり

**評** 三の巻、北條親子が好悪いといふ人し、画面あり  
三人が顔を、仇もて傷まるとや、之、硬是、この作  
者の妙、

仇この親子の好悪、牧の方ハ、時政たまさし、時  
ハ、父母にうち越にる正遠し、幾行か読ゆこむ人  
うち上、好の尤やおつりふたむは、立野備杖  
来れりと聞て、時政、慮て世人を去るを、牧  
の方ハ、湯島ト、あ、る得させ人として、走り去り、我

時ハ、驛のを、書きし、たる書状を、細く引裂て、袂  
へ入れたる、當時ハ、光景を、目前に見る、加如し、去  
りるト、實録ト、掘るときハ、牧の方の為、時  
継子ト、この母子の間、よりふりしよしあるト、  
今此物後、つ、実の母子の如く見ゆ、志、り、も、いと  
睦し、ト、書した、思ふト、北親子の不和ある  
物、この物、誤ト、不用おれ、実録ト、掘りて、  
親子夫婦同一体の好悪を、宗とせし、子ヤ、かくて  
實母子ト、似、あせし、なるが、し、  
**圖** この段の大意ハ、實に評言の如し、時政ハ、牧  
の方の継子あるよし、又その不和ありし事、  
かを、今、こ、よて、説出せ、心、説ト、枝まきて、あ、

くは煩し、故に其の母に實の母子ありとも、  
何と由書き、只うち見らるる人、實の母子  
の如し、是則牧の方をも一盃人の走る、其時の  
大奸ある所、以後々々巻に至らば、おのづから  
氷解をなし、  
[四]の巻五十に、阿三郎秀作に別きて、三四年絶  
て安否を問ふと云り、前に秀作の誠何れ共、安房  
の大國といふに由り、特に大國と満祿の麓  
と、さしは隔るる所といふ、元は、いかに生活に暇  
あくと、三四年のうち、一兩度、音のれせぬ  
と申す、不承然といふに、限りあり、彼秀作  
加事、素より父母に志らせ、其共、満祿の山寺、

由

ハ親も折々やると、き事之、この序を由て、秀作を  
訪ひ、人事の易々ゆへし、され、秀作が絃城へ招  
れしといふ事を、今更しをやくして、阿三郎秀作  
を訪し、絃城へやく、き事を聞かると、その  
所、障るにゆり、得訪はむとか、或ハ里人に、秀  
作が絃城行の事を傳へ、聞て、知人と思ふに、暇あ  
して、名をかかく、うち、教人とかいふ、正所、ハ  
四年不承然、甚しき、人に優へき、其、備後上、許村  
にて、の再會にも、阿三郎、一向に、秀作を絃城に  
ありとの、思ひぬ、不承り、其、面、さま、ハ  
あつ、や、し、  
[六]阿三郎加三四年、秀作を訪やりし、故り情

由あることとあれ、これを不汝快といふべし  
少を、既に秀作が教訓にありて、武藝の事を思  
ひ、之を、弓管新作を旨として、養父母に仕人子  
の縦まりく、秀作が、阿前を遣ふとも、更に内  
に入ると、く、山河を、是則、讐敵、国、以、鈍、佛、等を  
撃し、とき、所司、殿、ある、石、の、不、勤、に、害、して、某、也  
し、時、を得、て、國、の、為、に、力、を、尽、し、功、成、り、名、遂、け  
て、一、郎、の、全、と、も、ま、り、心、乞、ま、う、し、て、遂、に、こ、の  
地、を、領、ま、り、し、中、賦、去、ら、ら、ば、又、さ、ら、に、請、り  
よ、し、山、あ、ま、ま、の、を、や、と、い、ふ、處、に、あ、ら、は、て、見  
る、べ、し、高、た、る、器、量、の、人、か、ら、事、れ、漢、に、多  
う、り、阿、三、郎、山、し、木、曾、の、藩、胤、ふ、る、よ、し、を、志、す

で、豊、に、事、ふ、く、ハ、農、夫、わ、て、杉、果、人、さ、う、と  
き、ハ、秀、作、が、阿、前、を、往、還、ま、る、と、も、屋、内、へ、ハ  
入、り、べ、の、り、を、又、木、曾、の、藩、胤、と、い、ふ、事、を、志、す  
ホ、と、も、ま、ら、ら、あ、ら、は、て、武、士、と、あ、り、志、を、得、た、ら  
州、人、と、い、秀、作、千、里、の、外、に、あ、り、と、も、必、い、ち、ま、き、て  
安、石、を、問、ひ、且、昔、日、の、恩、義、を、謝、す、し、其、家、傳、の  
お、の、つ、か、た、家、傳、の、表、り、九、人、の、う、へ、を、し、て  
其、是、否、を、論、を、へ、の、り、を、か、れ、ハ、阿、三、郎、の、さ  
し、之、廿、の、見、物、に、秀、作、ハ、満、禄、に、あ、り、け、り、と、思  
ハ、せ、ぬ、ハ、許、我、の、再、層、の、飯、に、感、情、薄、し、よ、り、や  
秀、作、が、結、城、に、お、く、よ、り、作、て、更、に、許、我、に、在  
せ、て、ハ、其、處、に、彼、也、ハ、其、間、止、り、結、城、を、許、我

子世りの子てハ、再會の故おろし々かす、  
れを不抜候といハ、ハ、ハ人かうへに何と  
べし、お節ト拍ハ、おは、豪傑の上ト、受が、  
し、

評四の卷、蜂佛の事、何ヤ、人、て見たるヤ、う  
に思へ、お山、出処を忘れたり、それをお山し、ろく  
取ま、トて、豊台か、剛直、鈍佛、因、か、奸邪、阿三郎か  
仇撃に至て、一段、お説を結べ、り、自由自在、の筆  
あるか、お、よ、本、如、キ、阿三郎、一、二、か、為、に、竊、に、植  
は、ある、巨石を滾落せ、事、也、七、ヤ、く、一、三、に、あら  
れ、こ、る、よし、を、解、く、野邊、医、りの、果、り、段、に、一、三、三  
の、比、植、心の、お、とり、ま、て、権、ひ、た、る、手、械、を、も、て、阿

三郎と名れり事、この人の気のつかぬ場あり、又  
豊台か、敵、余、ト、撃、つ、れ、無、實、の、罪、ト、死、を、受、る、と、き、阿三  
郎、の、武、藏、ある、浅、草、寺、へ、参、り、此、心、居、あ、り、せ、を、此  
女、年、に、孝、子、ト、名、あり、この、とき、お、山、も、家、に、在、り  
ハ、手、を、束、ね、て、父、の、死、を、待、つ、の、事、あ、ら、ず、毛、を、吹  
ん、と、ト、て、又、更、に、疵、を、求、る、こと、お、山、あ、る、し、お、山、  
ら、ハ、よく、お、山、作、り、お、山、たり、又、一、人、阿三郎、養、父、の  
亡、骸、を、埋、葬、し、家、に、飯、を、に、栗、手、の、哀、傷、に、お、山、り、も  
乱、さ、な、形、を、お、し、評、を、改、め、阿三郎、に、其、素、生、を、お、  
ト、め、て、告、る、一、段、お、山、あり、れ、り、と、際、し、真、の、佳、境  
とい、お、山、で、き、ぬ、凡、この、物語、ハ、栗、手、夫婦、ト、一、三、ハ、  
本、名、お、山、お、山、氏、お、山、お、し、お、山、れ、と、お、山、其、素、操、ハ、お、山、

義士節夫端に羞むことよし、これら其作者の新筆  
あらん阿三郎木曾の落胤と聞きしより、初  
の阿三郎にゆゑを、これに難劇を在ることよし  
と、その場を脱れよと高く、又五の巻、仇討つ  
段に、龍堀園内、尼執佛等加、いよく酔まるる為体、  
さして、評を、事ゆきけり、この眼代、よこ、尼  
も、毒の脱、腰に折、あか、四き色情、何よし、しを  
酔諸の端にあふ、た、その人物を見るか、如  
し、可る、思、こらに難、あけり、し、社、司、暇、で、一  
三加、新、兵、九、集、で、阿三郎を、兵、一、や、る、五、ま、り、り  
歌舞伎狂言め、た、ま、い、や、あ、り、こ、れ、の、い、あ、ふ、初  
巻の末に、野島の情の追兵の段、又八犬傳にも、新

実安西加、鐘に、来、る、段、主、徒、矢、旗、鎧、ま、し、の、出、風  
、難、劇、の、正、本、よ、む、こ、ち、す、草、紙、物、活、に、舞、伎  
を、難、て、い、あ、ら、く、し、て、興、が、さ、め、る、大、人、の、さ  
し、あ、し、か、あ、ら、か、評、が、志、し、ほ、し、い、ひ、き、そ、れ  
程、評、が、直、に、い、は、る、秋、お、れ、が、談、て、聞、さ、ふ、そ、の  
趣、の、舞、伎、に、似、て、も、正、本、の、せ、り、娘、を、ま、し、へ、そ、  
義大夫本のもん句を取らむ、よくその場を脱る  
、故、に、活、路、や、す、ら、か、に、果、し、の、あ、す、そ、の、事  
句、欄、め、ら、す、と、は、評、評、理、本、の、類、し、て、手、つ、ら、い  
あるハ見るにも堪を、先年仁戸へ下りしとき、こ  
の作者に聞しことあり、奈春平の有名なさハ、剣  
戦突戦、又傷跡等の一事あり、人眼前に見る山の

櫛之、その事常に見よ山の、只彼戯手の假戦に  
 あり、おりの修羅の一段の、雑劇の面影を写さ  
 る此ハ、人情の多うす、これを書き用は河  
 り、及ハ、そのおろし拙作の趣をよく見よといれ  
 き、何をか人身かくつ知つて、傍角の困窮、在つ  
 こんて聞ておおやれ、評ハしヤ、ハ、比、おき、右  
 戦ひ、おもひく、の衰、公論、いひかたし、そ  
 れいまつ、それ、又、この初編の、妙所をいハ  
 ン、縊を引、加如く満禄寺を撰とて、秀作を引出  
 し、秀作を撰とて、筠長老を引出し、筠長老を撰  
 とて、新邪隆光を引出し、新邪隆光を撰とて、  
 時夏を引出し、時夏を撰とて、并平を引出せ、若  
 由

するその事、無理ある趣、向絶てあり、但  
 初編の、さう下、便前後二編の、妙所、  
 [評] 金聖嘆の水滸評、おハ、に借符と、  
 [評] 俱利伽羅丸、事、おハ、に借符と、  
 乙ハ、戒刀との、つ、おハ、に借符と、  
 の、おハ、に借符と、  
 れハ、その、おハ、に借符と、  
 いハ、し、おハ、に借符と、  
 ら、人、又、懐刀との、おハ、に借符と、  
 [圖] 此、これ、よく、見、おハ、に借符と、  
 人、おハ、に借符と、  
 唐話の、おハ、に借符と、  
 朝、おハ、に借符と、  
 大、おハ、に借符と、  
 此、おハ、に借符と、



リと看官疑あるべき筈之、去リれ山、画像を  
一卷の模様まで子、案と在るまは、板を失  
まりと知りつて、補ひ正さるる多し、刀の長  
短に、緊要の事とけられ、その正しきしつけ  
かりき、その巻を讀むて行せ、短刀に玉柄  
ふを、又在じにたる長劍にも、けらるることも  
自然にしつるべけれあり、  
よ之本好き世の見物、或は朝夷より、ハ犬傳勝れ  
りといふ山の河、大女も如北思ひ玉子、  
左も是を見るとき、ハ犬傳を兄とす、こく  
朝夷を弟とす、こし、そのハ犬傳を勝れりと  
る山のハ、嬋妍くる姫うへ、ハ房の犬に侍る、奇

由

談怪説を、勘ふありし、去りれとも朝夷ハ、前版  
子為朝河、且嶋浪り、事相似たり、新奇をあ、  
み、端さんことハ、ハ犬傳より難う、こし、此の  
こあらす、ハ犬士にハ本傳あり、本傳なき山のハ  
作しやせう、し朝夷にハ本傳あり、且昔時ハ  
人物ハ、多々実録より出たり、実録評あるときハ、  
作者の趣向に自由を得、これを綴り、あふ人  
事、容易の業とハ思、れ、柳北作者ハ、趣向を立  
る事速、こし、思慮を後編まで、旋りさす、草を  
綴るに、稿を易を、無邊無教、千態万状の寓言、胸臆  
あり涌出、泉の端する如し、と簡を、去りれとも  
初中後に、必約束あり、その筋融らるること

く文章奇絶なりて、失得ること大なり、真に天稟  
の奇才、お説の大筆といふべし、おりも吾儒才  
也、その巧拙を評せしむ、金聖嘆が所云、横子  
作者の自叙を引出さん所の、多しなりぬ、  
の答り事とを、し、この朝夷の初編の趣向、大  
り、二編の仕込ぬ、意味深き事か、し、  
第一編に多りて、漸々に佳境にたれり、拙評の  
とまぬかぬ、作者の各に、紙紙多あり、  
一節子ハとき、端し、か、し、諸思ひの外、  
り、か、い、け、お、き **板元** を、い、く 東西々々、  
爰に、か、い、け、お、き **板元** を、い、く 東西々々、  
大夷評判記下之巻終

由

物の巧拙を評さるる、今昔和漢に多しといへど  
も、皆是隻手打すれは、詰問ありて、答述さし、今こ  
の評判記は、し、か、ら、も、作者の自釋を見人なり、言  
を設て問難せり、月下の門にあらねども、  
に聞くもの、これ未曾有の珍書ありきや、余幸に  
符の稿本を得て、愛玩秘藏、  
おれへらく、夫独樂は衆樂にしか、  
人、一、二、三、  
知覚し、その好むを日未にまさ人、  
を、  
し、  
人の非をいふものは、  
三枚園

由

の批評を志らそ。只その才を景慕して、その書を  
愛するの深きにふれり。さればみや。翁は二川を誦  
してせき、評の的確を丁寧にし、あはけ付けて還さ  
れし。その量巨海のをくあらざば、世の言ひりて  
かゝるに及ん。かゝる評書を人に見せざば、ま  
ろ狭くと天をいかにせまじと思ふ。折、山青堂  
が鴻書もて、板せんと云ふまゝに、おのか蛇足に  
綴りあはせて。又稿本を東都にくたつ。遂に翁  
の序さへ獲て、まづ寶物に花を飾らせ、若輩に繁  
日山崎が、家櫻を鑿て、世に薫らすること、はふ  
りぬ。是の書は、世に於て無難なり。と云ふも、今こ  
れは平安の稽古と云ふも、今音操、淳琴、実再識

春夜山人  
今音操 淳琴 実再識  
平安の稽古と云ふも、今音操、淳琴、実再識  
はふりぬ。是の書は、世に於て無難なり。と云ふも、今こ  
れは平安の稽古と云ふも、今音操、淳琴、実再識

城内通迄は直管村不我  
の字本を請ひけり  
と申す又申す  
丸き市島文庫に  
あり

明治二十二年一月

春城子人

由

